

出雲弥生の森博物館

研究紀要

第1集

創刊の辞

渡邊 貞幸

弥生時代の出雲平野における水域復元

高橋 周

西谷3号墓1/10復元模型の製作について

須賀 照隆

西谷15・16号墳について

花谷 浩

大井谷Ⅱ遺跡の防長型土師器

高橋 周

出雲弥生の森博物館研究紀要

第1集

目 次

Contents

創刊の辞	渡邊貞幸
Sadayuki WATANABE	
Foreword	
弥生時代の出雲平野における水域復元	高橋 周 1
Shu TAKAHASHI	
Study on the restoration of the Izumo Plain and water area in Yayoi period	
西谷3号墳1/10復元模型の製作について	須賀照隆 15
Terutaka SUGA	
Making the diorama of Nishidani No.3 tumulus on a scale of 1/10	
西谷15・16号墳について	花谷 浩 29
Hiroshi HANATANI	
On Nishidani Nos.15 & 16 tumuli	
【資料紹介】	A Short Report on the Archive Materials
大井谷II遺跡の防長型土師器	高橋 周 44
Shu TAKAHASHI	
Report on the Bouchou (Yamaguchi Pref.) style Haji ware in Ooidani No.2 site	

PL. 1 出雲弥生の森博物館近景



創刊の辞

出雲弥生の森博物館は2010年4月29日に開館しました。幸い今日のところ評判も良く、年明けには5万人目の入館者をお迎えできました。

博物館を準備する過程で私たちは、来館者の目線を最優先に考え、面白くて分かりやすく子供でも楽しめる内容にすることを目指しましたが、それだけでなく、展示には研究の最前線を盛り込むことを目標として掲げました。そして、具体的に展示を作り上げる作業の中で、「面白い展示は活発な研究活動なくしてはありえない」という、いわば当たり前の原理を、いく度も痛感させられることになりました。

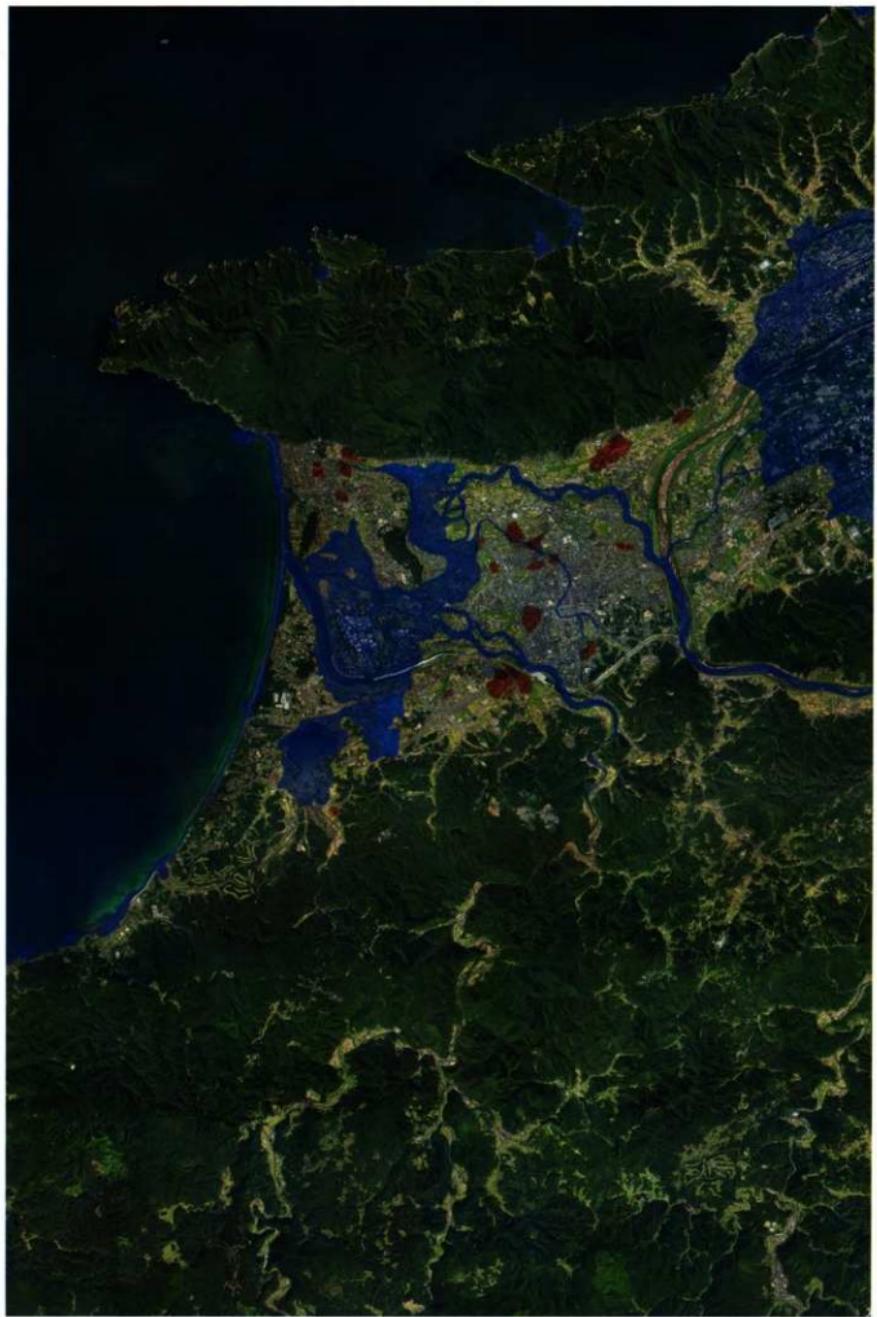
言うまでもなく、博物館は展示施設であると同時に、研究成果を常に広く発信するアクティブライブな機関でなければなりません。この研究紀要は、このような理念に基づいて、本館の活動を更に活性化するべく発刊するものです。

私たちのような地方博物館にとって、研究紀要を定期刊行するのは並大抵のことではありません。しかし、徐々にではあっても博物館の高邁な理想に近づくためには、推進力としての研究活動が不可欠であることは明らかです。学界に貢献する論文を本誌に掲載できるよう精進することをお誓いして、創刊の辞といたします。

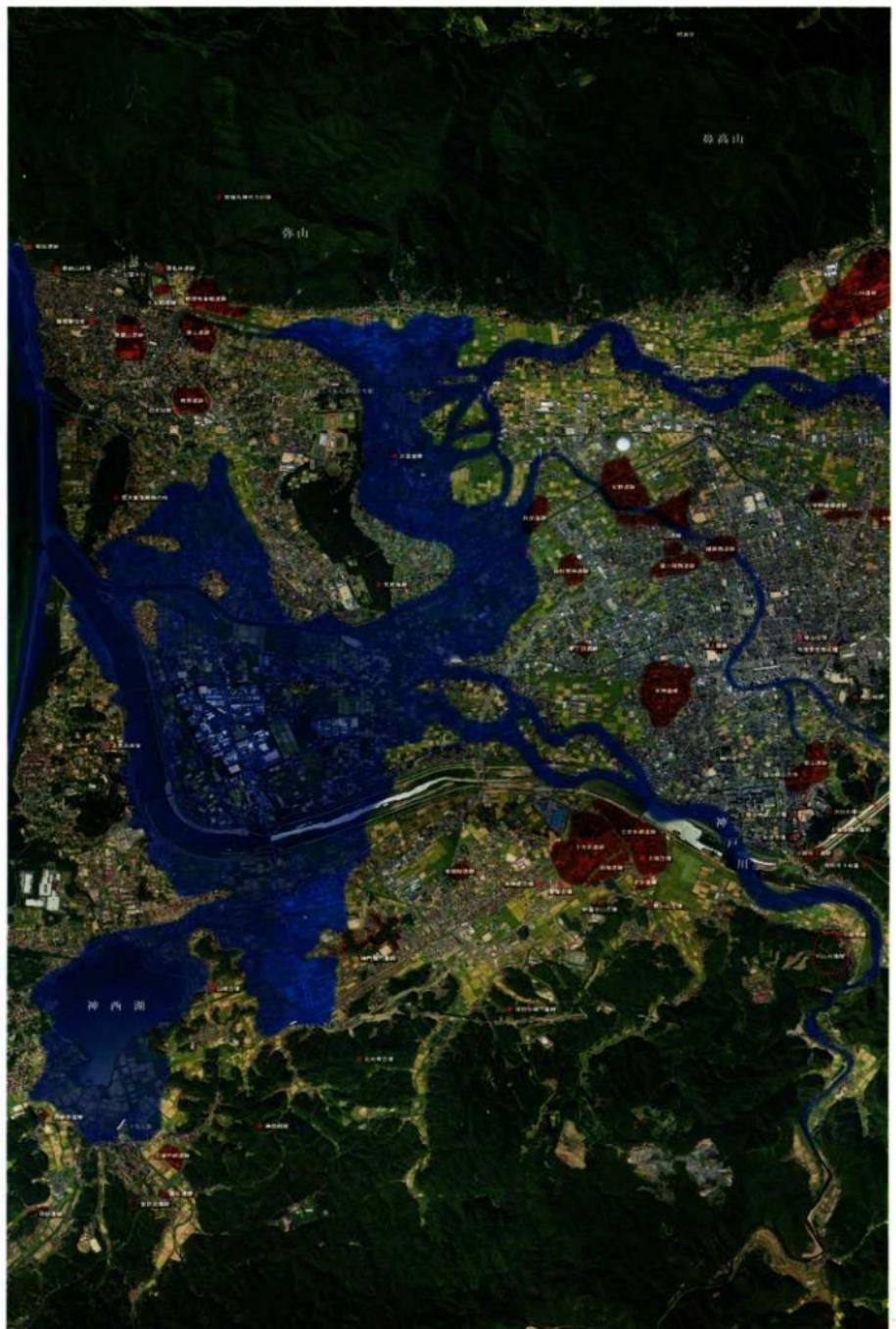
2011年3月

出雲弥生の森博物館

館長 渡邊 貞幸

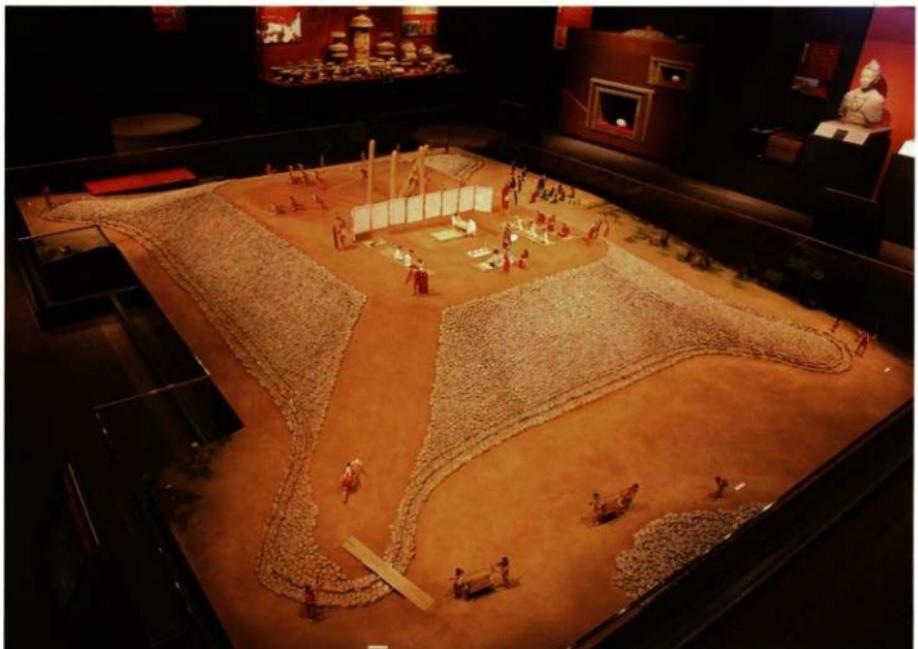


弥生時代の出雲平野における水域復元



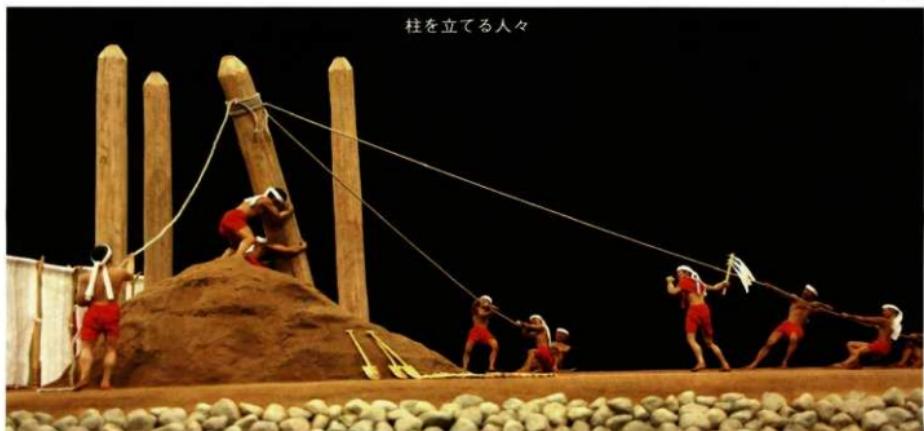


1. 西谷 3 号墓 1/10復元模型全景（1）



2. 西谷 3 号墓 1/10復元模型全景（2）

柱を立てる人々



棺を納める人々



墓に集う人々



土を運ぶ人々



模型各部



復元された弥生人の姿

弥生時代の出雲平野における 水域復元 高橋 周

1.はじめに

『出雲国風土記』神門郡条に「神門水海」が見えるように、奈良時代の出雲平野西部には斐伊川や神戸川が注ぐ大きな潟湖があり、現在とは異なる景観が広がっていた。この出雲平野の景観は、弥生時代には既に形成されていたようである。

出雲弥生の森博物館のエントランスに1/6000の航空写真を展示するに際し、出雲市内の主な遺跡や古墳、指定文化財を所有する寺社など（付表）を示すとともに、「弥生時代の水域」（巻頭カラー PL.2・3）を復元して表示することになった。後述するが、出雲平野における水域の復元については、数多の研究が積み重ねられている。できるだけ多くの研究を参考にしたが、至らない点も多々あるかと思う。以下、諸賢のご批判ご叱正を得ることができれば、幸いである。

なお、水域を復元した弥生時代は2500年前～1850年前と長期間にわたる。当然のことながら、その間にも景観の変化が続いていると考えられる。ここでは細かな時期設定を行わないが、2100～2000年前の弥生時代中期を凡その時期とした。

2.出雲平野の水域復元－研究史－

完新世における出雲平野の水域復元に関する研究史は、徳岡隆夫氏がまとめている（徳岡1996）。それによると、古地理図としての嚆矢的な研究は、日本地質学会の見学旅行案内書に掲載された大西郁夫氏によるものである（図1、大西・松井1980）。

大西氏が作成した古地理図は、その根拠を示されないが、その後に提示された諸説に対して影響を与えたとされる。その後、中海の干拓・

淡水化の論議が進む社会的な背景もあり、自然史的側面の研究が進められるようになる。その研究成果を背景として、徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨昂氏らが約2万年前（更新世後期後半）から約1200年前（奈良時代）までの古地理の変遷を示している（徳岡ほか1990）。そのうち、弥生時代に係る古地理として、約2400年前の様相を提示する。その委細については論及されていないが、「弥生の小海退」による海面低下を想定し、出雲平野西部に存した潟湖は現・神西湖付近に汽水域を残すのみとなった、とする（図2-②）。

一方で、林正久氏はテフラ（火山性噴出物）などを指標とした沖積層の分析や微地形分類によって、出雲平野の地形発達を考察する（林1991）。それによると、3600年前の三瓶山噴火による火砕流が大量のデイサイト礫を神戸川河口から供給し、扇状地性三角州を急速に前進発達させた結果、平野の一部が島根半島とつながったとする。このような由来をもつ標高5m以上の扇状地性三角州を「三角州Ⅰ面」とし、また、古志～塩治～矢野付近にかけてみられる微高地面はそれに先行するものと指摘する。弥生時代以降、三角州が前進する過程で形成された標高2～3m以上の地形を「三角州Ⅱ面」として、奈良時代には出雲平野西部で「三角州Ⅱ面」が形成されたと指摘する（図6）。

林氏が、弥生時代に係る古地理図として提示したのは、縄文時代末期～弥生時代初頭の様相である（図3-②）。この復元は、「三角州Ⅰ面」の分布に基づくもので、出雲平野西部に存した潟湖の汀線として出雲市平野町～矢野～天神～知井宮～神西のラインを想定する。斐伊川の流路は想定していないが、北山山地南麓には帶状の低湿地が広がっていたとし、古宍道湖の汀線は斐川町直江～出雲市西代を結ぶ位置にあったとする。

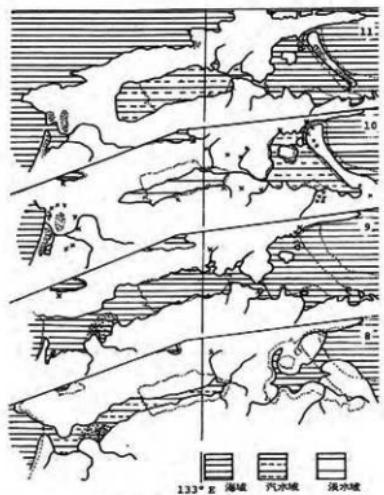


図1 中海・宍道湖の古地理

8：縄文早期（約7000年前）、9：縄文中期（約4000年前）、10：弥生後期（約1800年前）、11：風土記時代（約1200年前）

その後、博物館の展示や研究論文において、出雲平野周辺の水域復元がいくつか提示されるものの、その論拠を掲げるものは多くない。そのうち論拠が明示されたものに、低湿地遺跡の発掘調査で得られた地質学的資料とボーリング資料から、完新世の海面変化と古地理の変遷について考察した中村唯史氏の研究がある（中村2006）。

中村氏は、朝駒川遺跡群の河川堆積層の調査成果によって、縄文時代晩期（2500年前頃）から奈良・平安時代（1200年前頃）にかけての海水面は標高0m付近にあったとする。また、1700～1500年前頃に-0.4～-0.1mの若干の海面低下の可能性もあるが、基本的に大きな海面変化はなかったとする。これらをふまえて、中村氏は徳岡氏らの論考（徳岡ほか1990）に基づき約2000年前の様相を提示する（図4-②）。徳岡氏らの案とは想定期が若干異なるが、神

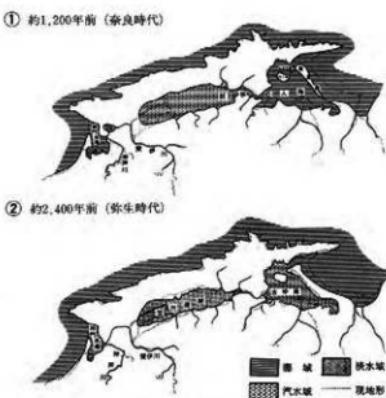


図2 中海・宍道湖を中心とした古地理の変遷

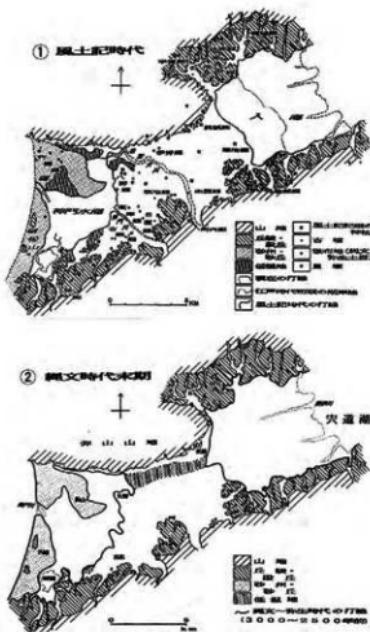


図3 出雲平野の古地理

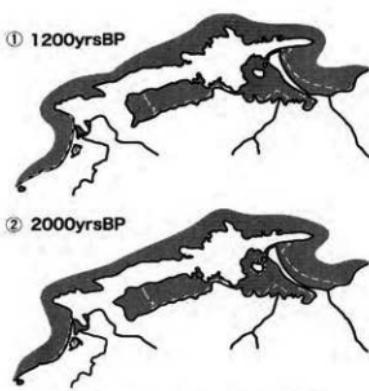


図4 中海・宍道湖の古地理変遷

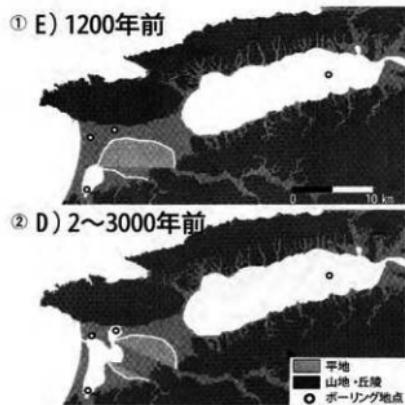


図5 完新世における古地理の変遷

西湖の分離と出雲平野西部の潟湖の拡大を示したところに大きな特徴がある。中村氏は矢野遺跡の報告書に係る論考（中村2010）においても2000年前の様相を提示するが、その内容に大きな変更点は見られない。

また、島根県古代文化センターによる「風土記時代の歴史景観復元事業」に伴う学術調査用ボーリングの成果に基づき、山田和芳氏と高安克己氏が²～3000年前の出雲平野の古地理を提示する（図5-②）。同事業による成果を、表1にまとめるので参照されたい（山田・高安2006a・2006b・同2007）。弥生時代については、弥生時代後期（1900年前頃）に出雲平野西部の潟湖が淡水性から汽水性へ変化したこと、大社町遙堆周辺に想定される斐伊川河口デルタが古墳時代中期（1600年前頃）から前進し、短時間で潟湖北部を埋積したことなどを明らかにする。

弥生時代における出雲平野の水域復元の試みは、管見の限りにおいて以上のごとくまとめることができるが、いずれも小縮尺の地図による概略的なものである。基本的には出雲平野西部の潟湖の存在は共通するが、浜山砂丘より東側の潟湖がどの程度埋積したのかという点において、それぞれに見解が異なることは注目されよう。

すなわち、斐伊川河口デルタの埋積をどのように捉えるかということが、水域復元のポイントと見ることができる。

表1 ボーリング調査による古環境復元

時代 ボーリング調査地	縄文時代			弥生時代		古墳～奈良・平安時代	
	4000年前	3900年前	3000年前	2000年前	1800年前	1400年前	1100年前
大社町遙堆地区	閉鎖的な汽水性潟沼		淡水性潟沼		汽水性潟沼		河口・河川性後背地
出雲市下横町地区	閉鎖的な汽水性潟沼		河口域		河口域の堆積		河口域の前進
出雲市大島町地区	閉鎖的な汽水性潟沼		淡水性潟沼				汽水性潟沼
神西瀬中央部	閉鎖的な汽水性潟沼		淡水性潟沼				汽水性潟沼

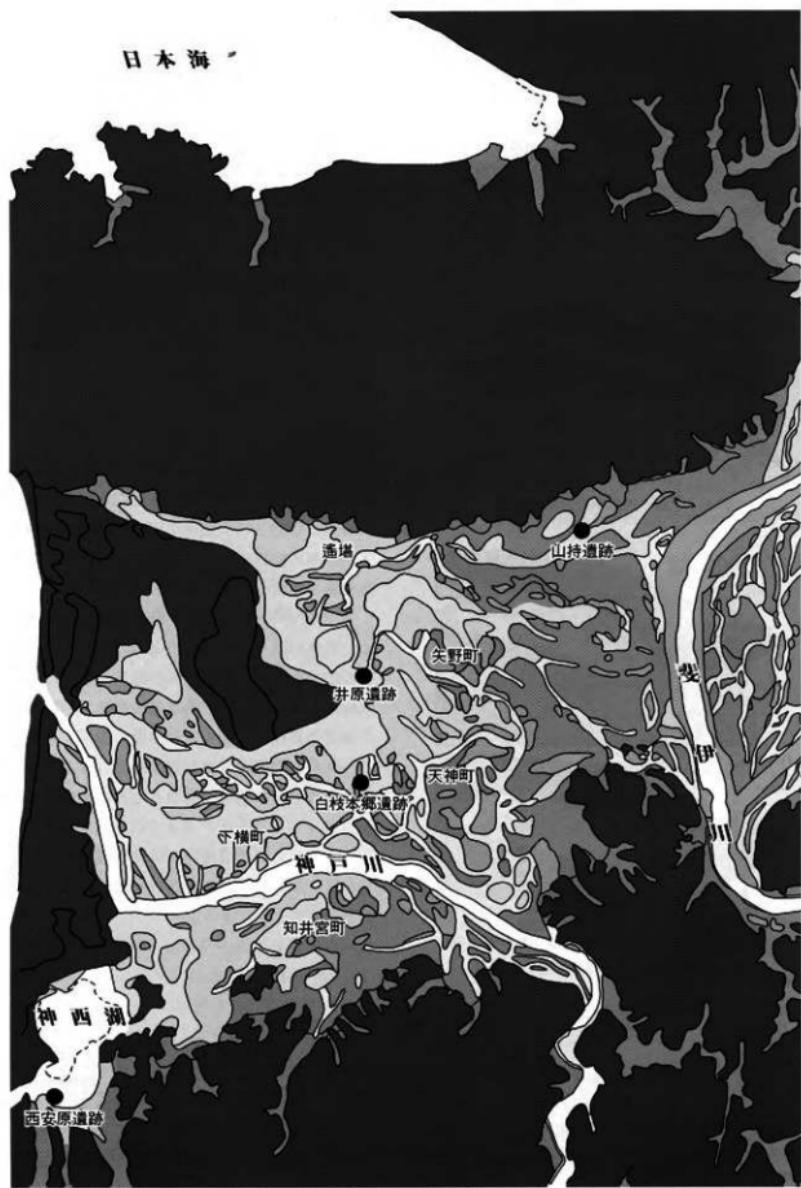


図6 出雲平野の微地形分類図

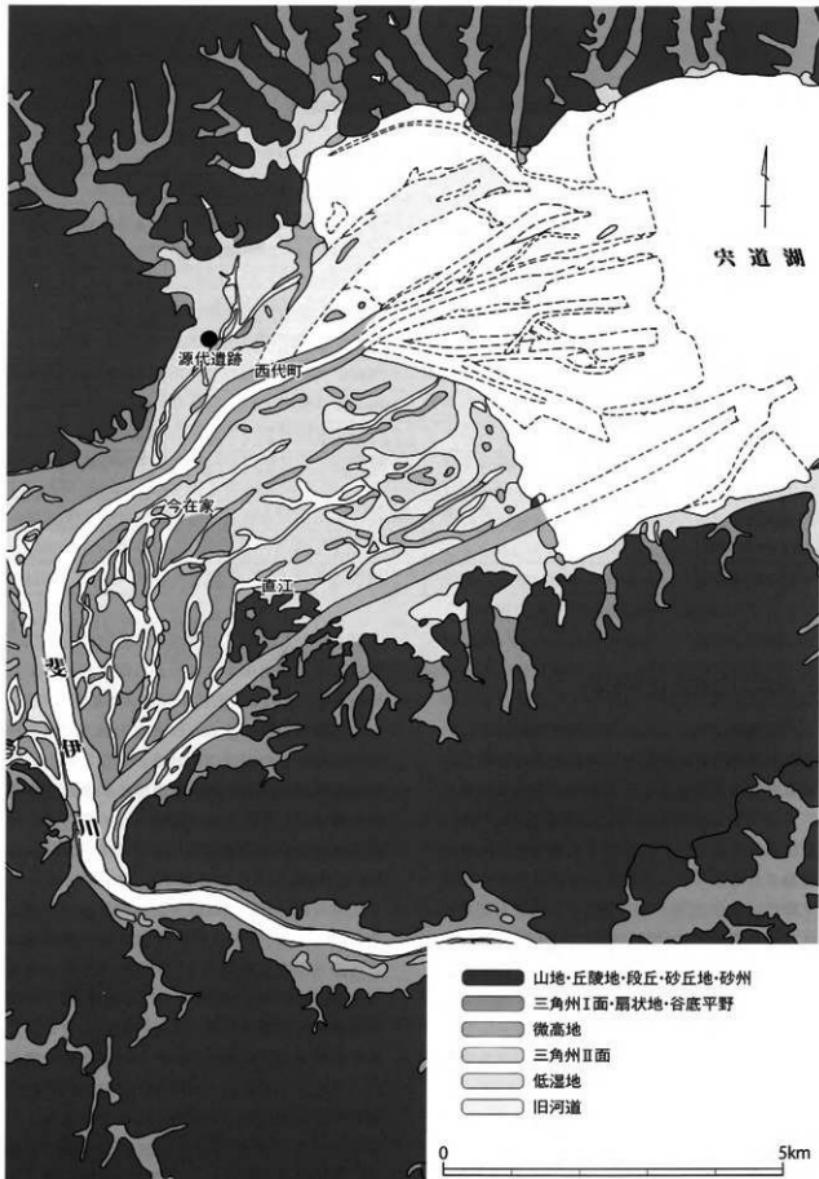


表2 花粉分析による古環境復元

区分	遺跡名	所在地	周辺環境	種生	該当時期	報告書
北部	源代遺跡	国富町	低湿地、次第に水田開発	イネ科増加、谷間の低湿地のスギ林減少、山地にはカシ類	弥生中期～古墳	(1)
	門前遺跡	東林木町	水田地帯	イネ科高率、オモダカ属・セリ科などの水田種増加、スギ減少、アカマツ增加	弥生～中世	(2)
	山持遺跡	西林木町	旧河道の沼沢湿地	水辺にヨシ類・アシ・カヤツリグサ類・苔類、自然堤防上にヨモギ類・アラマツ科・シロザサ	～弥生終末期	(3)
	里方本郷遺跡	日下町	沼沢湿地、周辺で水田開発	アシ・ヨモギ類・スゲ・カヤツリグサの繁茂、ヨモギ類・イゴクサ属などの水田雜草、アカマツ林の拡大	弥生前期～中期	(4)
	五反配遺跡	大社町	沼沢湿地	カヤツリグサ科等、スギ林の増加	縄文晩期～弥生	(5)
中部	高岡遺跡	高岡町	斐伊川の作用による自然堤防	ササ類・蘆草、クスノキ科の樹木生育	弥生後期～古墳	(6)
	矢野遺跡	矢野町	河内もしくは後背湿地内	湿地にヨシ類・ヒシ類など湿性植物	弥生前期～古墳	(7)
	小山遺跡	小山町	小河川の跡に形成された凹地で水田耕作	ヨモギ属高率、イネ科の増加	弥生前期～奈良	(8)
	中野清水遺跡	中野町	源原を流れる網状河川の一つ、後背湿地	湿性植物繁茂、スギ林の増加	弥生	(9)
	姫原西遺跡	姫原町	河川・淡水の沼澤湿地	イヌ科増加、アシ原の広がりとカヤツリグサ科の卓異、周辺にヨモギの茂る草原	弥生～古墳	(10)
	菅丁田遺跡	白枝町	河内もしくは後背湿地内	周辺水辺のヨモギ、水面にアシなどのイネ科、自然堤防上の高高地にヨモギ類	縄文晩期～弥生	(11)
	白枝木郷遺跡	白枝町	河川の流れが彌綴に変わる後背湿地	ブナ・ミズナラ・スギの増加	縄文晩期	(12)
	小畠遺跡	天神町	河川から後背湿地・沼沢湿地へ変化	砂丘地帯のクロウサセマリ、平野部ではスギ林	弥生前期～中期	(13)
	藤ヶ森南遺跡	今市町	水田地帯	イヌ科高率、背後の丘陵にアカマツ林、カシ類、谷沿いにスギ林	弥生後期～奈良	(14)
南部	古志木郷遺跡	古志町	集落内、周辺に水田	背後の丘陵にスギ・アカマツ、道路・中西部にニヨウマツ類、近辺にハンノキ湿地帯	弥生～古墳	(15)

3. 遺跡の分布と花粉分析

水域復元においては、弥生時代の集落遺跡の分布や花粉分析のデータより得られる古環境復元も重要な資料となる。

水域復元に関わる遺跡の分布を図6に示す。遺跡の分布と水域との関係で重要な点は、既に指摘されるように、出雲平野西部に分布する弥生時代の集落遺跡の多くが、「三角州I面」上に立地していることである。各遺跡におけるボーリング調査でも「三角州I面」を構成するデイサイト質の堆積物が確認されている（中村1998・2001ほか）。したがって、水域復元において「三角州I面」を基本に考察を進めることは有効な方法と考えられよう。

また、出雲平野西部の潟湖の汀線付近と想定される井原遺跡において、旧河道跡と自然堤防跡が認められるることは注目される（峰松2002）。旧河道跡は「旧河川」に伴う漸移層と湿地成粘

土層からなる。旧河道跡西辺に古墳時代中期の遺構・遺物が集中することから同時期の河川と想定する（岸はか2002）。これらの遺構のうち、旧河道跡西辺を沿うように南北方向へ連なる波板状のピット列が注目される。すなわち、同様の遺構は山持遺跡（西林木町）でも確認され道路状遺構として捉えられている。おそらく、井原遺跡のそれも同様に道路跡とみられる（廣江はか2010）。

これらのピット列は調査区南端で旧河道跡と重複しており、「旧河川」は古墳時代中期以前に機能したとみる方が妥当であろう。旧河道跡より西へ約40mの微高地には弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が集中していることからすると、「旧河川」はこの時期まで機能し、埋積が進行した古墳時代中期に「旧河川」周辺の開発が始まったとみることができよう。

以上のような井原遺跡における環境の変遷は、古墳時代中期に斐伊川河口デルタが前進し短時間で潟湖北部を埋積したとの指摘（山田・

高安2006a)とも関連して、弥生～古墳時代における出雲平野西部の潟湖の様相を示唆するものといえる。

そして、出雲平野各地での発掘調査の際に行われた花粉分析のデータも、水域復元において貴重な資料となる。その花粉が含まれる層位の年代を比定する根拠に不確定なものも含むが、当時の植生の推定から付近の地形環境を考えることは有効な方法であろう。特に平野部での花粉分析において、付近に小河川の存在を想定する遺跡が多く認められることは注目される。すなわち、弥生時代の出雲平野には網状に小河川が流れ、あるいは旧流路には三日月湖などが残在した可能性が高いと考えられる。表2として、水域復元に際して参考とした花粉分析のデータを示した。

4. 弥生時代の水域復元作業（一） —出雲平野西部の潟湖の汀線—

弥生時代の水域復元として1/6000の航空写真の中で表現するに際し、基本的な資料としたのが「出雲平野（地形分類）」（林2001、図6）である。林氏は米軍撮影の航空写真に基づき、1/50000の地図に三角州Ⅰ面・Ⅱ面、微高地、旧河道などの地形分類を提示する。先述したように、弥生時代の集落遺跡の多くが標高5m以上の「三角州Ⅰ面」に立地し、ボーリング調査でもそれを形成したデイサイト層が確認されることから、「三角州Ⅰ面」の範囲までは弥生時代において既に陸化していたという前提で捉えた。

そして、水域復元上でのポイントの一つとなるのが、平野西部の潟湖に注いだ斐伊川と神戸川の河口の位置である。この点については、山田・高安両氏の研究（山田・高安2006a・2006b・2007）に基づき、斐伊川の河口域を大社町遙堪地区周辺、神戸川の河口域を下横町地区周辺として捉えた。

以下、①斐伊川河口域、②神戸川河口域、③神西湖周辺での水域復元についてまとめる。

① 斐伊川河口域（大社町遙堪地区周辺）

林氏の地形分類によれば、大社町遙堪地区的平野部（八島町・常松町付近）には「三角州Ⅱ面」が点在し、鳥趾状三角州の様相を呈する。鳥趾状三角州は大量の土砂が流出すると同時に、外海からの影響が少ない河口で発達する三角州で、斐伊川が平野西部の潟湖へ注ぐ作用で発達したものと考えられる。したがって、遙堪地区に点在する「三角州Ⅱ面」は、斐伊川河口デルタが前進し埋積を始める古墳時代中期までのいずれかの時期の様相を示唆するものとみられる。

また、斐伊川河口域周辺の「三角州Ⅱ面」については、先述した井原遺跡の遺構の様相が参考となる。すなわち、井原遺跡は「三角州Ⅱ面」と「低湿地」との間に立地しており、少なくとも弥生時代後期には周辺の一部が陸化した可能性が高いとみられる。ただし、遺跡の東側を流れた「旧河川」の周辺には弥生時代の遺構・遺物が見られないことからすると、当該期の遺跡は堆積の進まない「旧河川」の河口域に近く、平野西部の潟湖の影響を受けやすい土地だったと想定することができる。したがって、当該地における弥生時代の潟湖の汀線は、「三角州Ⅱ面」のラインよりも西を走っていた可能性が高いといえる。このように考えると、少なくとも弥生時代後期においては井原遺跡以北に分布する「三角州Ⅱ面」は既に陸化していたと捉えることができ、さらに、「低湿地」と地形区分される範囲でも、一部が陸化していたとみられる。

今回の水域復元においては、依拠するデータが少ないため、井原遺跡以北については「三角州Ⅱ面」を潟湖の汀線として捉えることとした。

② 神戸川河口域（下横町地区周辺）

山田・高安両氏の研究（山田・高安2006a・2006b・2007）によると、神戸川の河口域は下横町地区周辺とされる。

また、神戸川河口域周辺の汀線を考える上で参考となるのが、白枝本郷遺跡である。同遺跡の調査の結果、その周辺は縄文時代後期ごろまで人々が生活できる環境にはなかったが、潟湖のような水域からは完全に分離していたこと、遺物包含層から弥生時代中期中葉の土器が出土することから、同時期には安定的に集落が営まれる環境が付近に存在したことが明らかになった（角田ほか2006）。

林氏の地形分類では、白枝本郷遺跡周辺には「三角州Ⅱ面」や「微高地」が点在する。これらは神戸川の旧流路に伴う自然堤防と考えられる。同遺跡の報文では自然堤防が浜山砂丘付近にまで早く到達したとして、弥生時代における潟湖のような水域の想定は困難としている。しかしながら、自然堤防の到達の時期をめぐる明確な根拠は示されておらず、直ちには従いがたい見解である。おそらく、弥生時代においては自然堤防が形成される途上と考えられ、神戸川河口域の自然堤防の一部に集落が形成されていたとする方が妥当ではなかろうか。

このように考えると、神戸川の河口域として、下横町および白枝本郷遺跡が立地する白枝町以西の地域を想定することができよう。想定の範囲を超えるものではないが、神戸川の河口域は、上流からの大量の土砂と斐伊川からの水流により、カスプ状（尖状）三角州の様相を呈した可能性が考えられる。

汀線については、「三角州Ⅱ面」のラインが後世の影響を含む可能性があるため、今回の水域復元では採用していない。ただし、白枝本郷遺跡の調査から「三角州Ⅱ面」のライン付近に汀線を想定することは大過ないとみられる。したがって、現地形の4～5mの等高線を基準として、「三角州Ⅱ面」のラインと下横町および白枝町以西とみられる神戸川河口域の位置想定を勘案しつつ復元を試みた。

なお、等高線については国土地理院「25,000分の1地形図」（大正4年測図・昭和9年修正測図）「大社」「出雲今市」および中村唯史氏作成の地形図（中村1996）を参考とした。

③ 神西湖周辺

神戸川河口域以南から神西湖周辺にかけては、現在確認される弥生時代の遺跡（知井宮多聞院遺跡など）の分布と「三角州Ⅰ面」の範囲はほぼ一致する。

神西湖南岸に位置する西安原遺跡では、材を並べた木列状造構と集石造構が標高-0.4～-0.1mで見つかっている。弥生～古墳時代の遺構である。木列状造構は、軟弱な湿地帯を歩くための木道で、接岸した舟までの道として想定される（西尾・野坂2000）。同遺跡は「三角州Ⅰ面」と「三角州Ⅱ面」の境に位置しており、弥生時代における付近の汀線は「三角州Ⅰ面」のラインを想定することができよう。

神戸川河口以北の地域の汀線では、「三角州Ⅱ面」のライン付近を想定したが、神西湖周辺では「三角州Ⅰ面」のライン付近が想定される。これは流入する土砂量の違いで、三角州発達の進度に違いが生じたためと考えられる。

したがって、神戸川河口域以南から神西湖周辺にかけては、「三角州Ⅰ面」のラインと現地形の4～5mの等高線を勘案しつつ汀線の復元を試みた。

5. 弥生時代の水域復元作業（二）

一穴道湖の汀線・斐伊川の流路と海岸線一

現在の一穴道湖西岸に広がる平野部は、斐伊川層と呼ばれる厚い堆積物に覆われている。層厚は平均4～5mであるが、斐伊川東岸では10mにも達する地点がある。古い堆積物を含むが、その多くは鉄滓を含む近世以降の「鉄穴流し」による生産土砂の堆積物である（林1989）。斐伊川鉄橋遺跡で地下7mから弥生時代後期～

古墳時代前期の土器が出土したように（池田ほか1980），弥生時代の地表面は現地表面の4～5m以下に存するとみられる。したがって，現地形からの弥生時代の汀線推定は困難と言わざるを得ず，從来の諸説を比較しても宍道湖西岸の汀線は一致を見ていない。また，その根拠を示す所説も多くない。

その中で，林氏は「三角州Ⅰ面」の分布に基づき，斐川町直江～出雲市西代町のラインを宍道湖の汀線として提示する（林1996）。今回の水域復元に際しては，斐川町直江～斐川町今在家の現・斐伊川東岸までのラインについて，林氏の説を参考に「三角州Ⅰ面」の分布と現地形の等高線を勘案しつつ復元を試みた。

ただし，現・斐伊川西岸に関しては，遺跡の分布を考えると「三角州Ⅰ面」に依拠することはできない。すなわち，出雲市国富町の平野部に立地する源代遺跡の調査で行われた花粉分析やプラント・オパール分析の結果，弥生時代中期～古墳時代前半においては低湿地で水田開発が始まっていたことが明らかとなっている（古環境研究所1993，大西1994）。ただし，古墳時代後半には再び湖底となったとの指摘もあり，弥生時代の汀線は同遺跡から遠くない位置にあったものと考えられる。したがって，斐伊川西岸の美談町～平田町のラインについては，「旧河道」「低湿地」地形を参考に汀線の復元を試みた。

斐伊川の流路については，山田・高安氏が奈良時代の斐伊川（出雲大川）に関して，「近世以降の河川性（洪水性）堆積物に広く覆われているために，それよりも時代的に古い風土記時代の出雲大川（斐伊川）の旧河川・自然堤防は現在の地表面に表れていない可能性は極めて高い」（山田・高安2006a, 46頁）とする。まさに正鵰を射る見解である。本来は地質的なデータを参考にすべきではあるが，今回の復元に際しては，林氏が示す「旧河道」地形を参考とした（図6, 林2001）。すなわち，斐伊川の流路につ

いては，出雲市武志町付近から西流し，萩原町一稻岡町一平野町を経て，大社町遙堪地区付近を河口と想定した。一方で，西林木町に所在する山持遺跡では，縄文時代早期～弥生時代後期中葉までの斐伊川の堆積作用による厚い粗砂の層が確認されており（原田ほか2009），武志町一西林木町・山持遺跡周辺から西流した可能性もある。ただし，同遺跡が弥生時代後期後葉には堆積作用のない安定した環境になると指摘であることから，その周辺には斐伊川の分流が流れていたとみるべきではなかろうか。

先述したように，出雲平野には網の目状に河川が存在した可能性がある。細部にわたる復元は困難なため，今回の復元においては分流や中小河川は削愛し，主な河川のみを表わした。

また，海岸線については，基本的に大きな変化はなかったと考えられる。今回の復元においては，海岸砂丘の堆積などを想定した上で，現地形の等高線5～10mのラインで復元を試みた。

6.おわりに

以上，出雲弥生の森博物館エントランスの航空写真上に表現した「弥生時代の水域」の復元作業について述べた。

自前の地質調査を行わなかったため，結果として先行研究に依拠せざるを得なかったが，各地での発掘調査の成果を含め，現段階での成果を示すことができたのではないかと思う。

ややもすれば発掘調査で見つかった遺構・遺物が注目されることが多いが，その時代に生きた人々を支えた自然環境を考察することも大変重要な作業である。今後の研究の進展を祈りつつ，稿を終えたい。

【補記】「弥生時代の水域」復元作業にあたっては，中村唯史氏（島根県立三瓶自然館）よりご教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 池田満雄・川上 稔・西尾克己ほか 1980『西谷墳墓群』古代の出雲を考える2, 出雲考古学研究会
- 大西郁夫 1994「平田市源代遺跡の花粉分析」「源代遺跡2」平田市埋蔵文化財調査報告第5集, 平田市教育委員会, 23-32頁
- 大西郁夫・松井整司 1980『島根県東部の第四系』『日本地質学会第87年総会・年会見学旅行案内書第1班』, 32頁
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・石原清・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1990『出雲平野西部の自然史』『山陰地域研究(自然環境)』第6号, 21-34頁
- 角田徳幸ほか 2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 岸 道三ほか 2002『新内藤川広域基幹河川改修事業地内 井原遺跡発掘調査報告書』島根県出雲土木建設事務所・出雲市教育委員会
- 古環境研究所 1993『源代遺跡・中電鉄塔周辺遺跡・国富地区におけるプラント・オバール分析』『源代遺跡1』平田市埋蔵文化財調査報告第4集, 平田市教育委員会, 39-59頁
- 徳岡隆夫 1996『中海・宍道湖の完新世古地理の研究史』『島根大学地球資源環境学研究報告』第15号, 27-33頁
- 徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三瀬昂 1990『中海・宍道湖の地史と環境変化』『地質学論集』第36号, 15-34頁
- 徳岡隆夫・三瓶良和・渡辺正巳・竹廣文明 2000『宍道湖・中海の自然史、開発と古代出雲』『日本地質学会第107年学術大会見学旅行案内書』, 49-60頁
- 中村唯史 1996『山持川川岸遺跡の古環境』『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会,
- 中村唯史 1998『小山遺跡周辺の古地理に関するコメント』『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会, 91-93頁
- 中村唯史 2001『下古志遺跡の立地と環境』『下古志遺跡一本文編-』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市教育委員会,
- 中村唯史 2006『山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷』『第四紀研究』第45巻第5号, 第四紀学会, 407-420頁
- 中村唯史2010『矢野遺跡の立地と古地理』『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』, 1-5頁
- 西尾克己・野坂俊之 2000『原始古代の湖陵町』『湖陵町誌』, 湖陵町, 147-240頁
- 原田敏照ほか 2009『山持遺跡Vol.5(6区)』国道431号道路改修事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7, 島根県教育委員会
- 林 正久 1986『出雲平野の地形とその形成過程』(石田寛教授退官記念事業会編『地域-その文化と自然-』)
- 林 正久 1989『斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成』田中義昭編『古代出雲文化の展開に関する総合的研究-斐伊川下流域を中心として-』山陰地域研究総合センター
- 林 正久 1991『出雲平野の地形発達』『地理学評論』第64巻第1号, 日本地理学会, 26-46頁
- 林 正久 1996『出雲平野周辺の地理的環境』『出雲神室荒神谷遺跡』本文編, 島根県教育委員会,
- 林 正久 2001『出雲平野(地形分類)』『中国地方の古地理に関する調査(調査図集)』国土交通省中国地方整備局・国土地理院
- 廣江耕史ほか 2010『山持遺跡6(4・6・7区)』国道431号道路改修事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8, 島根県教育委員会
- 峰松拓史 2002『井原遺跡におけるボーリング調査』『新内藤川広域基幹河川改修事業地内 井原遺跡発掘調査報告書』島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会, 147-151頁
- 山田和芳・高安克己 2006a『「神門水海」の湖岸線復元-地形・地質コアによる検討-』『出雲国風土記の研究Ⅲ-神門水海北辺の研究(資料編)-』島根県古代文化センター調査研究報告書34, 41-52頁
- 山田和芳・高安克己 2006b『出雲平野-宍道湖地域における完新世の古環境変動-ボーリングコア解析による検討-』『第四紀研究』第45巻第5号, 第四紀学会, 391-405頁
- 山田和芳・高安克己 2007『地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史』『出雲国風土記の研究Ⅲ-神門水海北辺の研究(論考編)-』島根県古代文化センター調査研究報告書38, 1-13頁

挿図・表 出典一覧

- 図1 (大西・松井1980) を一部改変
 図2 (徳岡ほか1990)
 図3 (林1996)
 図4 (中村2006)

- 図5 (山田・高安2007)
 図6 (林2001) で提示された微地形分類図を、小稿
 に関わる地形のみ表示するよう再トレス
 表1 (山田・高安2006a・2006b・2007)

表2 報告書

- (1)『源代遺跡2』平田市教委, 1994
 (2)『門前遺跡』出雲市教委, 2006
 (3)『山持遺跡 Vol.5 (6区)』島根県教委2009
 (4)『里方本郷・山持遺跡4』島根県教委, 2008
 (5)『五反配遺跡』島根県教委, 2004
 (6)『高岡遺跡』出雲市教委, 2000
 (7)『矢野遺跡』出雲市教委, 2010
 (8)『小山遺跡第2地点』出雲市教委, 1998

- (9)『中野清水遺跡(2)』島根県教委, 2005
 (10)『姫原西遺跡』島根県教委, 1999
 (11)『若丁田遺跡(2次調査)』出雲市教委, 2008
 (12)『中野清水遺跡(3)白枝本郷遺跡』島根県教委, 2006
 (13)『余小路・小畑遺跡』島根県教委, 2007
 (14)『藤ヶ森南遺跡』出雲市教委, 1999
 (15)『古志本郷遺跡VI』島根県教委, 2003

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧(1)

表示名称	指定品・指定名称等	所在地	国				展示	時代
			国宝	重要文化財	史跡	県指定		
出雲大社	出雲大社本殿 墓内殿1基襍礼1枚	大社町件築東	○					江戸
	出雲大社 楼門・神體所・玉垣など		○					江戸
	秋野山遺跡下精		○					鎌倉
	絲巻太刀・銘光忠		○					室町
	赤絹綾白羅(鬼・大袖付)		○					室町
	紙本墨書き後幅欄天皇京錦宝御代繪		○					鎌倉
	紙本墨書き後幅欄天皇王道再興繪		○					室町
	紙本墨書き 宝治一年 運宮儀式江邊状		○					室町
	出雲大社境内追跡出土品		○					鎌倉
	北島國造家跡胸門						○	江戸
	出雲大社參道の松並木						○	江戸
真名井遺跡	銅戈・硬突勾夷	大社町件築東	○					弥生
五反配遺跡	五反配跡	大社町件築東						弥生
鹿嶋山遺跡	鹿嶋山遺跡出土品	大社町件築南					○ ○	弥生
藤岡家住宅	藤岡家住宅 舟形圓筒11枚はか	大社町件築南		○				江戸
船佐遺跡	船佐遺跡出土品	大社町件築北					○	弥生
奉納山跡	奉納山跡出土品	大社町件築北					○	弥生
原山遺跡	原山遺跡出土品	大社町件築北					○	弥生
修理免本郷遺跡	修理免本郷遺跡出土品	大社町件築北					○	古墳
修理免神光寺世跡	修理免神光寺世跡出土品	大社町件築北					○	江戸
南原遺跡	南原遺跡出土品	大社町件築北					○	弥生
旧大社駅	旧大社駅本屋・附接札1枚	大社町件築北		○				大正
	旧大社駅駅員室施設ほか						○	大正
荒木本落葉伴の地	荒木本落葉伴の地 舟古文書ほか	大社町件築北					○	江戸
日御崎神社	白絹威羽(鬼・大袖付)	大社町件築北	○					鎌倉
	史草或仮巻		○					鎌倉
	日御崎神社社殿 附・社殿地割図ほか		○					江戸
阿部荒神社跡	阿部荒神社跡出土品	大社町件築北					○	江戸
河下台場跡	河下台場跡	河下町					○	江戸
網屋浜台場跡	網屋浜台場跡	十六島町						江戸
鶴澤寺	石製軒簡・附瀬州鏡1面	別所町	○					平安
	銅造觀音菩薩立像(2体)		○					飛鳥奈良
	紙本着色山王本郷仏像		○					室町
	紙本着色毛利元就像		○					戦国
	紙本着色金輪曼荼羅圖		○					鎌倉
	銅鏡		○					鎌倉
	紙本墨書き後幅欄天皇御題文		○					南北朝
	紙本墨書き長年執連状頤運文書		○				○	戰国
	鶴澤寺根本堂 舟接札1枚							

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧（2）

表示名称	指定品・指定名称	所在地	国		県 指定	市町 指定	展示	時代
			国宝	重文				
猪目洞窟遺跡	猪目洞窟遺物包含層 猪目洞窟遺跡出土遺物（65点）	猪目町		○			○	繩文-
上長浜貝塚	上長浜貝塚	西園町		○				繩文-
青木遺跡	青木遺跡	東林木町				○	弥生-	
大寺古墳	大寺古墳	東林木町			○			古墳
大寺薬師（萬福寺）	木造薬師如来兩脇土像（3躯） 木造觀世音菩薩立像（2躯） 木造四天王立像（4躯）	東林木町	○	○				平安
山持遺跡	山持遺跡	西林木町					○	弥生-
鳶巣城跡	鳶ヶ巣城跡	西林木町						戦国
美談神社古墳群	美談神社古墳群	美談町				○		弥生
上島古墳	上島古墳	上島古墳出土品			○			古墳
中村1号墳	中村1号墳	国富町				○	○	古墳
多武志峰跡	多武志峰跡	国富町						古墳
山根垣古墳	山根垣古墳	西郷町						古墳
西西郷廃寺	西西郷廃寺	西郷町						古代
高野寺	大般若經（内蔵写経四帖）	野石谷町		○				難倉
上石堂平古墳群	上石堂平古墳群	野石谷町						
南許豆神社古墳群	南許豆神社古墳群	小津町				○		古墳
木舟窓跡	木舟窓跡	小境町						平安
一堀寺	一堀寺	小境町				○		
本寿寺古墳	本寿寺古墳	岡田町						古墳
馬見塚跡	馬見塚跡	浜町						奈良
出雲屋敷	出雲屋敷	浜町				○		江戸
深田谷横穴墓群	深田谷横穴	芦夜町				○		古墳
井原遺跡	井原遺跡	白枝町						○
白枝荒神遺跡	白枝荒神遺跡	白枝町						古墳-
巣丁田遺跡	巣丁田遺跡	白枝町						○
矢野遺跡	矢野貝塚	矢野町						○
小山遺跡	小山遺跡	小山町						○
藏小路西遺跡	藏小路西遺跡	小山町						○
姫原西遺跡	姫原西遺跡	姫原町						○
中野美保遺跡	中野美保遺跡	中野町						○
中野清水遺跡	中野清水遺跡	中野町						○
西谷墳墓群	西谷墳墓群	大津町		○				弥生古墳
西谷2号墓出土ガラス鏡	西谷2号墓出土ガラス鏡					○	○	弥生
山田本陣	本陣造佛（2棟）	大津町						江戸
荻籽古墓	出雲荻籽古墓出土品	荻籽町						平安
今市大念寺古墳	今市大念寺古墳	今市町		○				古墳
塙山古墳	塙山古墳	今市町						古墳
天神遺跡	天神遺跡	天神町						○
長者原廃寺	長者原廃寺	上塙治町						奈良
大廻城跡	大廻城（河山城）跡	上塙治町						戦国
上塙治築山古墳	上塙治築山古墳	上塙治町		○				古墳
築山遺跡	築山遺跡	上塙治町						○
上塙治藏山古墳	上塙治藏山古墳	上塙治町						古墳
半分古墳	半分古墳	上塙治町						古墳
池田古墳	池田古墳	上塙治町						古墳
上塙治横穴墓群	上塙治横穴墓群	上塙治町						古墳
大井谷II遺跡	大井谷II遺跡	上塙治町						古墳
三田谷I遺跡	三田谷I遺跡	上塙治町						○
光明寺3号墓	光明寺3号墓	上塙治町				○		奈良
曾沢古墓	曾沢古墓	上塙治町						平安
神門寺	神門寺境内出土古瓦 神門寺境内発掘寺跡	塙治町						奈良
海上遺跡	海上遺跡	塙治町						○
刈山古墳群（小坂古墳）	小坂古墳 刈山古墳群	馬木町						○
朝山古墓	朝山古墓	朝山町						古墳
土松塚跡	土松塚跡	鶴原町						古墳
法王寺	金剛般若波羅像正軸ほか3軸	野尻町						奈良
古志本郷遺跡	古志本郷遺跡	古志町						平安
放レ山古墳	放レ山古墳	古志町						○
大堀古墳	大堀古墳	古志町						古墳
古志遺跡	古志遺跡	古志町						○
下古志遺跡	下古志遺跡	下古志町						○
田畠遺跡	田畠遺跡	下古志町						○

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧 (3)

表示名称	指定品・指定名称	所在地	国		県 指定	市町 指定	展示	時代
			国宝	重文				
宝塚古墳	宝塚古墳	下古志町		○				古墳
妙蓮寺山古墳	妙蓮寺山古墳	下古志町			○		○	古墳
天神原古墳	天神原古墳	下古志町						古墳
多聞院遺跡	多聞院貝塚	知井宮町			○	○		弥生-一
神門横穴墓群	福知寺山横穴墓群(古墳)	知井宮町			○	○		古墳
北光寺古墳	北光寺古墳	東神西町			○	○		古墳
神西城跡	神西城跡	東神西町						空町
山地古墳	山地古墳出土遺物	神西町			○	○		古墳
只谷道路	只谷道路	漸陵町二部						奈良
三郎竹崎遺跡	三郎竹崎遺跡	湖陵町三郎						弥生-一
西安原遺跡	西安原遺跡	湖陵町三郎						弥生-一
鶴部古墳群	鶴部古墳群	湖陵町三郎						古墳
庭反遺跡	庭反II遺跡	湖陵町常楽寺						奈良-一
雲州久邑長沢燒窯跡	雲州久邑長沢燒窯跡	多伎町久村			○			江戸
矢谷道路	弥生(羽貫付着蓋形)土器	多伎町久村			○	○		弥生
経塚山古墳群	経塚山古墳群	多伎町口田儀						古墳
出雲齋井家たら羽鉄道路 (吉本鍛冶山内道路)	官本鍛冶山内道路ほか	多伎町美田儀						
朝日たら跡	朝日たら跡	佐田町高津屋						
聖谷たら跡	聖谷たら跡	多伎町小田						
越堂たら跡	越堂たら跡	多伎町口田儀						
越堂たら跡	越堂たら跡地蔵	佐田町大呂						古墳
八幡古墳	八幡古墳	佐田町原田						古墳
切石古墳	切石古墳							
須佐神社	氏座鏡太刀 中身無銘	佐田町須佐			○			
尾崎横穴墓群	尾崎横穴墓群	佐田町宮内						古墳
上野遺跡	上野I号墳出土品	宍道町佐々布			○			古墳
稚山古墳群	稚山I号墳	松江市宍道町白石			○			古墳
伊賀見古墳群	伊賀見I号墳	松江市宍道町白石			○			古墳
堤平遺跡	堤平遺跡	松江市宍道町白石						奈良
右宮神社	犬石 犬石	松江市宍道町白石			○			
金山要塞山城	金山(坂口I)要塞山城	松江市宍道町白石			○			室町
女夫岩遺跡	女夫岩遺跡	松江市宍道町六道			○			古墳-一
木縄家住宅	木縄家住宅 斜湯殿1種ほか	松江市宍道町穴道			○			江戸
伊志見一里塚	伊志見一里塚	松江市宍道町伊志見			○			江戸
杉沢Ⅲ遺跡	杉沢Ⅲ遺跡	斐川町直江						奈良-一
草原古墳	草原古墳	斐川町学頭						古墳
小丸子山古墳	小丸子山古墳	斐川町学頭			○			古墳
荒神谷遺跡	荒神谷遺跡	斐川町神庭			○			弥生
神庭岩船山古墳	神庭岩船山古墳	斐川町神庭			○			古墳
高瀬城跡	高瀬城跡	斐川町神庭						室町
出西・伊波野一里塚	出西・伊波野一里塚	斐川町神水			○			江戸
後谷遺跡	後谷遺跡	斐川町出西						奈良
天守平座寺	天守平座寺	斐川町阿宮						奈良
原鹿の旧豪農屋敷	原鹿の旧豪農屋敷(江角家)	斐川町原鹿			○			明治
加茂岩倉遺跡	加茂岩倉遺跡出土銅鐸	雲南省加茂町岩倉			○			弥生
神原神社古墳	出雲神原神社古墳出土品	雲南省加茂町茂中			○			古墳
神原正面道路群	神原正面道路群出土品	雲南省加茂町茂中			○			古墳
光明寺	光明寺	雲南省加茂町大竹			○			中世
妙見山遺跡	妙見山遺跡	雲南省本次町里方						平安
斐伊中山古墳群	斐伊中山古墳群2号墳出土品	雲南省本次町里方			○			古墳
斐伊郷新造院跡	本次塔の村庶寺號石	雲南省本次町里方			○			奈良
斐伊郷新造(尼)院跡	斐伊郷新造(尼)院跡	雲南省本次町里方			○			奈良
三刀屋じゅ山城跡	三刀屋じゅ山城跡	雲南省三刀屋町古城			○			中世
三刀屋尾崎城跡	三刀屋尾崎城跡	雲南省三刀屋町古城			○			中世
松本古墳群	松本第1号古墳	雲南省三刀屋町給下			○			古墳
松本3号墳	松本3号墳	雲南省三刀屋町給下			○			
峯寺	胡本著色聖觀音像	雲南省三刀屋町給下			○			平安
馬場遺跡	馬場遺跡	雲南省三刀屋町給下			○			平安
禪定寺	木造聖觀音立像(本堂安置)	雲南省三刀屋町乙加宮			○			平安
	禪定寺本堂	雲南省三刀屋町乙加宮			○			江戸
熊谷遺跡	熊谷遺跡	雲南省三刀屋町下熊谷						奈良平安
宮田遺跡	宮田遺跡出土绳文時代遺物	雲南省三刀屋町多久和			○			绳文
安田家住宅	安田家住宅	雲南省三刀屋町多久和			○			江戸
日倉城跡	日倉城跡	雲南省掛合町日倉合			○			中世
山根横穴墓	山根横穴墓出土品	雲南省掛合町松笠			○			古墳

西谷3号墓1/10復元模型の製作について

『出雲弥生の森博物館研究紀要』
第1集、15-28頁、2011年3月

須賀照隆

1.はじめに

2010年（平成22）4月29日、出雲市大津町に出雲弥生の森博物館がオープンした。この館の展示の中心的役割を担う展示物として設置されたのが、「西谷3号墓1/10復元模型」（以下「模型」と呼ぶ、PL.4）である。

この模型は1800年余り前に行われた西谷3号墓における王の埋葬の様子を復元したもので、当時の大型四隅突出型墳丘墓の姿のみならず、王の埋葬儀式を行う人々、儀式に集まつた人々、儀式を支えた人々など、そこに存在した「ヒト」の姿まで精密に再現している。

本報告では、模型製作にあたって重ねた検討の経緯と結果を記述し、復元の根拠を明らかにしておきたい。

2.西谷3号墓の概要

西谷3号墓は、出雲市大津町所在の国史跡「西谷墳墓群」にある。弥生時代後期の大型四隅突出型墳丘墓である。1983年から1992年にかけて島根大学考古学研究室を中心とする調査団によって綿密な調査が実施されており、墳丘の規模と構造、主体部の構造及び副葬品、祭祀に使用された大量の土器、壮大な墓上施設の存在などが明らかにされた（渡邊1992・1993）。

調査の所見では、墳丘主部の規模は約40m×約30m、高さ約4.5mと復元された。墳丘斜面には全面に貼石が施され、裾周りにも二重の敷石・列石構造がめぐっていた。

墳頂部の平坦面には少なくとも大小8つの土壙が確認されたが、中心的位置を占めるのは第1主体と第4主体と名付けられた2つの大型土壙で、これが東西に並列して掘り込まれている。

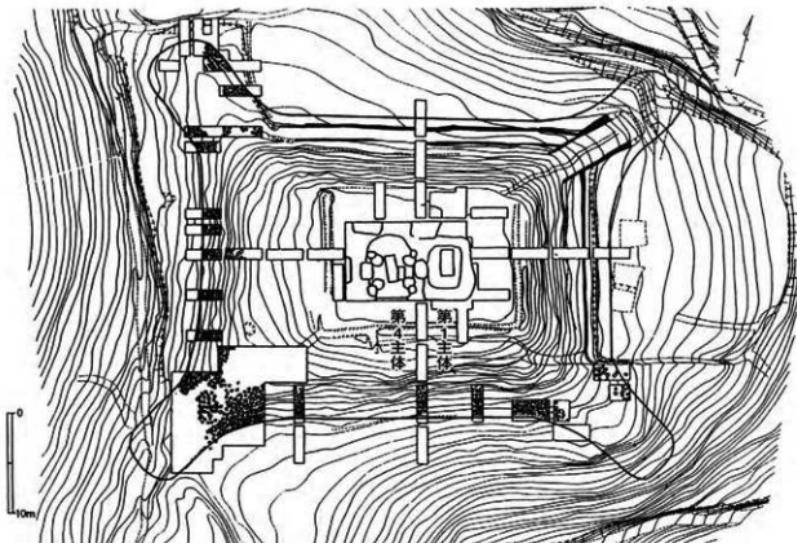


図1 西谷3号墓全体図 ($S=1/500$) ※渡邊1993一部改変

中央のやや東よりに位置する第1主体では、2段掘りの土壙(6.1×4.5×深さ1m¹)内に棺椁二重構造の施設(木椁2.6×1.2m, 木棺2.1×0.8m)が1つ埋置されていた。棺内一面には朱が敷かれ、ガラス小玉をはじめ多数の玉類が副葬されていた。土壙埋土の上の盛土上面には、棺上に相当する位置に朱の付着した拳大の円碟1つが置かれていた。それを中心に約100個体の土器が集積されていた。

第1主体の西に並び、ほぼ中央に位置する第4主体では、すり鉢状の土壙(6×4.5×深さ1.4m)内の中央最深部に大型の棺椁二重構造の施設(木棺2.1×0.8m前後)があり、さらにその東のやや高いレベルにも小型の棺椁(木棺0.95×0.5m)が埋置されていた。どちらも棺内一面に朱が敷かれていた。大型木棺には鉄剣1とガラス管玉20が副葬され、小型木棺に副葬品は認められなかった。土壙埋土の上の盛土上面には、大型木棺上に相当する位置に朱の付着した円碟1つ、小型木棺上に相当する位置に朱の付着しない円碟1つ、合計2つの円碟が置かれていた。大型木棺上の円碟周辺には小砾群があり、このあたりを中心とする直径4mほどの範囲に200個体以上の土器が集積されていた。これらの土器は、弥生後期の在地の土器(的場式)の他に、吉備地方から搬入された特殊壺・特殊器台の類(立板型)、丹後方面などに類例のある一群の土

器が含まれている。西谷墳墓群における大型四隅突出型墳丘墓の中では最も古い時期を示しており、第1主体、第4主体上の土器群は同一土器型式の時期のものである。

第4主体上では、土壙を埋めた後に改めて柱穴を掘って4本の柱を立てていたことも確認された。その後、若干の埋土を加えた後で各柱のすぐ外側に柱側に傾けた小さな柱を立て、さらに土壙外にまで広がる盛土を加えている。確認された円碟と大量の土器を使用した祭祀痕は全てこの盛土上で確認されたものであった。柱穴の土層から、柱はこの祭祀後比較的短期間の内に腐食もしくは撤去されたものと推定される。柱上部の構造は不明だが、祭儀の間だけ一時的に設置された特別な施設であった可能性が指摘されている。

なお、第1主体ではこのような痕跡は一切なかったが、土壙を埋めた後に土壙外にまで広がる盛土を加え、その盛土上で円碟と大量の土器を使用した祭祀を行う点は共通する。第1主体、第4主体埋土上の盛土の前後関係は不明であり、同時期に一体的に施された可能性もある²。

3. 模型制作の考え方

1) 基本コンセプト

「西谷3号墓1/10復元模型」を制作するにあ

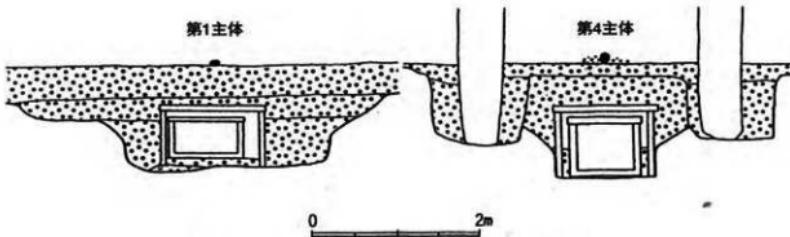


図2 主体部復元模式図 (S=1/60) ※渡邊2011より転載

たって、私たちが目指した基本的なコンセプトは次のようなものである。

- ・西谷墳墓群に葬られた「王」の存在を印象づけるものとする。
- ・人々の動きが見えるシーン設定を行う。
- ・考古学的な研究成果を基本にする。
- ・『魏志』倭人伝を始めとした歴史資料に記載された習俗を尊重する。
- ・可能な限り多くの情報が伝わるものとする。
- ・リアリティーを追求し、証明困難な細部の設定・造作についても学術的な知見や人間の行動パターンに矛盾のない範囲で造りこむ。

こうした基本コンセプトに基づき、王や墳墓の姿はもちろんのこと、そこに存在したであろう人物一人一人の姿・行動・持ち物まで詳細に作り込むことにした。

これによって、見れば見るほど新しい発見がある、魅力にあふれた模型の製作を目指した。

2) 基本的な場面設定

西谷3号墓の発掘調査では、墓の構造と形状、埋葬構造、副葬品、祭祀の様子など、様々な情

報が得られている。これらの情報をより多く視覚的に伝えるため、学術的な知見や人間の行動パターンに矛盾のない範囲で、可能な限り多くの動作が同時併行で行われたものと仮定して表現することとした。

まず、本模型で示すべき最も重要な情報として、①第4主体上の巨大な4本柱の様子、②第1主体もしくは第4主体の棺の様子、③各地からの参列者の様子、④造墓の様子、などが挙げられた。これを実現するためには、第4主体で棺が埋納された後に立てられた4本柱を見せる必要がある。このため、必然的に第1主体で棺を露出させることとなる。

①について想定される場面として採用したのが、第4主体の棺が埋められた後に4つの主柱を立てつつある場面である。

②について想定される場面として採用したのが、第4主体の棺が埋められた後、続いて第1主体の棺を納める儀式をしている場面である³⁾。

③については、この段階では各地の土器を使

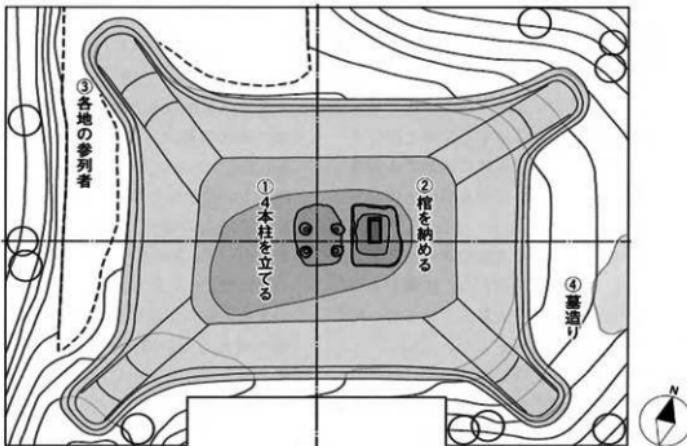


図3 模型の場面設定配置図

用した（人々が集まつた）墓上での祭祀は始まつてないと考えられるため、墓上での祭祀に参加するために墳裾周辺へ各地からの参列者が集まりつつある場面を採用した。

④については、この段階では墳丘はほぼ完成していたと考え、第1主体土壤埋土のための土運びをしている場面を採用した。ただし、貼石の一部も貼り残すことによって、その後の造墓作業も示唆することとした。

以上の場面が実際に同時並行したか否かは証明することが出来ないが、少なくともこれを否定する考古学的な証拠は現状で存在しない。より多くの情報を伝えるという観点から、こうした場面設定を採用することとした。

3) 被葬者の設定

模型の世界におけるストーリー性をより具体的にするため、第4主体と第1主体被葬者の人物像を設定した。

西谷3号墓は墳墓規模、副葬品、盛大な墓上儀式の痕跡などから、当地において隔絶した立場にあった人物を埋葬した墓であることは疑いのないところであり、中心となる被葬者を「出雲王」と呼称することに支障はないであろう。

墳丘のはば中央に位置するとともに、4本柱が立てられた唯一の埋葬施設である第4主体の被葬者こそが「出雲王」と呼ぶべき人物であったと考えられる。第1主体は第4主体と併行する位置に造られ、かつ第4主体に匹敵する規模をもつ埋葬施設であり、その他6つの主体部とは隔絶した規模と内容である。よって、「出雲王」に準じた地位にあった人物であったと考えられる。また、副葬品の内容から、鉄剣をもつ第4主体の被葬者は男性、大量の玉類をもつ第1主体の被葬者は女性と想定した。

男女として仮定した場合に両者の関係性として考えられた案が、婚姻関係の男女、実質的に政治を行つた男性と鬼道（呪術）でクニを治めた女性、という2つの設定である。本模型にお

いては、『魏志』倭人伝の記載内容により近いという理由から、後者の案を採用することとした。

模型の世界では、第4主体の男性を「男主」、第1主体の女性を「女主」と呼称し、男女二人の王がクニを治めていたと想定する。

4. 墳墓の復元

1) 墳丘の復元

從来から想定されている墳丘規模は、主墳規模約40m×約30m、高さ約4.5m、突出部を含めた推定規模については短辺が40m以上、長辺が約50~55mとなっている（渡邊1992・1993・坂本ほか2006・出雲市文化財課2006）。模型制作にあたって発掘調査の各部数値を再精査し、一定の基準に基づいた仮定数値をもとに墳丘設計図を作成した（図4）。

主墳部については、南辺と西辺裾残存部の墳丘傾斜角度、現状の墳頂平坦面傾斜変換点、推定基盤地形のレベルを基準として復元規模を決定した。なお、墳丘裾まわりの二重の敷石・列石構造については、調査で確認できた部分は調査値を踏襲し、それ以外は幅1m強、高さ0.25m程度に統一して復元することとした。以上の復元作業から導き出された模型における主墳部の復元規模は、長辺39m、短辺28.5m、最大高4.5mである。ただし、模型のシーンは土壤埋土上の盛土前の時間軸であるため、実際に作成する墳丘の復元高は土壤埋土上の盛土高⁴を差し引いて4.3mとした。

突出部については、まず比較的遺存状態の良い北西・南西突出部を調査から想定される最小値で復元した。復元された2つの突出部には幅・長さ共に差が生じたため、より大きな北西突出部を墓上へ登るための特別な突出部と仮定し、より小さな南西突出部を残った突出部復元の参考として採用することとした。参考とした

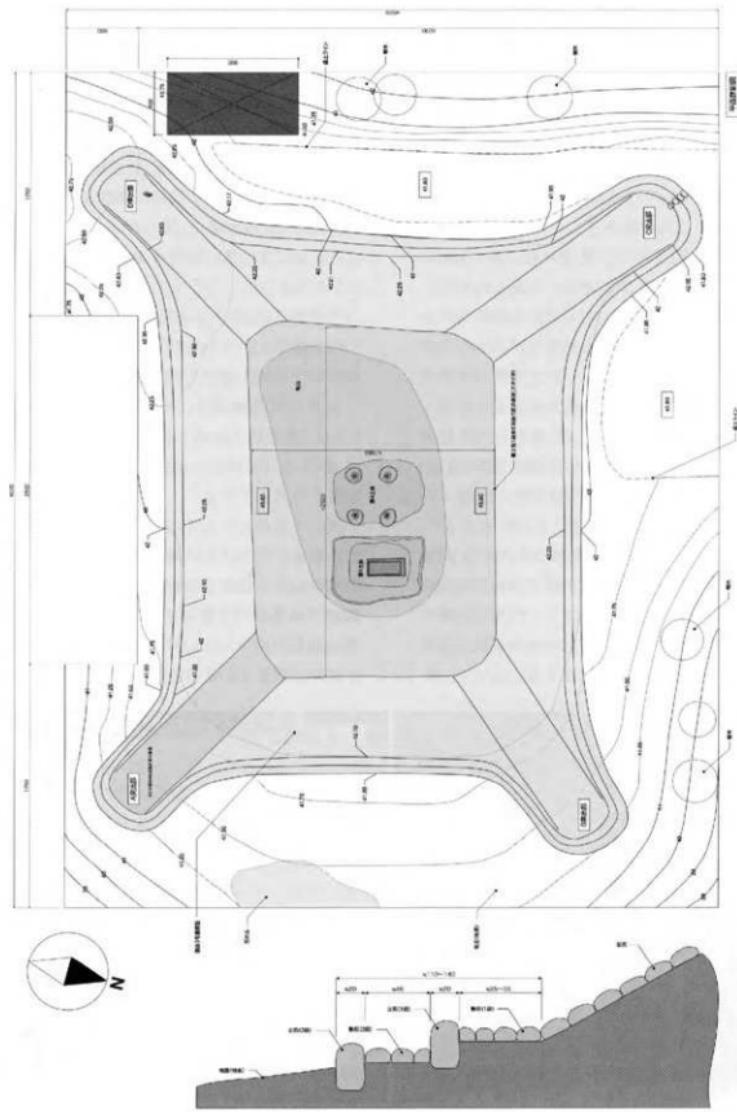


図4 復元模型設計図（上S=1/35 下1/4）

数値は突出部幅と平坦面斜距離である。

以上の推計から導き出された西谷3号墓の突出部を含めた全体規模は、長辺51.5m、短辺42.5mである。なお、この復元規模は仮定を重ねた模型制作上の規模であり、従来の想定規模を否定するものではない。実際の墳丘規模については凡そ以下のような誤差範囲が想定される。

主墳最大高：4.5m 前後

主墳規模：長辺37~42m 前後×短辺26~31m

全体規模：長辺50~55m 前後、短辺42m 前後

その他、配石構造については、発掘調査において確認された墳丘斜面の貼石及び裾まわりの二重の敷石・列石構造に基づいて欠損部も再現した。墓上へ登るための特別な突出部と仮定した北西突出部については、安来市宮山IV号墓（松本ほか2003）などを参考に、突出部先端に大きな石を並べた通路状構造（ステッピングストーン、渡邊2003）を想定した。

また、南東突出部平坦面については、設定シーン以後に想定される墳頂部での棺埋設作業や盛土作業等の効率性を勘案し、作業用通路として石を貼り残した。墳頂部作業終了後に当該部分の貼石を仕上げる想定である。

2) 墳頂部施設の復元

模型の場面設定において想定した墳頂部の施設は、発掘調査で確認されたものとして、王者の棺埋納後の土壌、王者埋葬上の主柱及び主柱穴、女王埋葬の土壌及び棺椁が挙げられる。

王者の埋葬については、平面規模約6m×約4.5mの土壌埋土を掘削する形で直径110~125cm、深さ60~90cmの主柱穴が4つ掘り込まれ、ここに直径30~40cmの柱が垂直に立てられていた。

柱の長さについては明らかでないが、5.5mの柱を想定し、これを柱穴へ落とし込むためのスロープ状盛土施設も設置することとした。

女王の埋葬施設は、平面規模が約6.1m×約4.5m、深さ約1mの2段掘り土壌の底に棺椁二重構造（木棺2.1×0.8m、木椁2.6×1.2m）を設置するものである。

復元する場面としては、棺が見え、かつ棺椁二重構造が理解できる瞬間を想定し、椁の蓋を閉めつつある場面を選択することとした。この時点では墓壇の2段目の掘り込みは埋められ、椁の蓋も閉められていたことが想定される。

また、柱立てのような土木作業と、おごそか

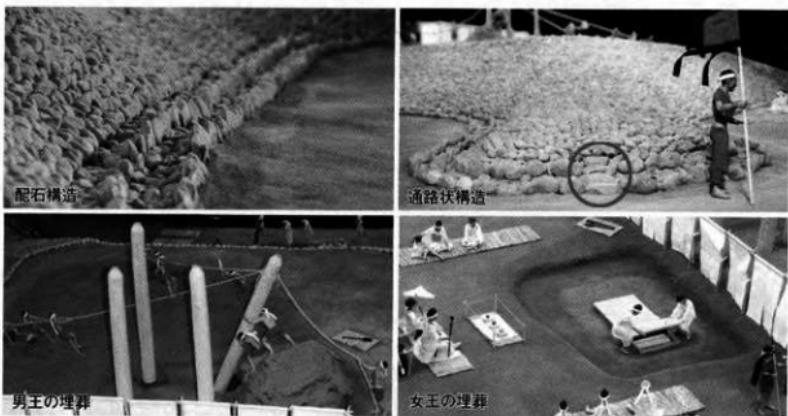


図5 復元された墳丘構造と墳頂部施設

であるべき棺を埋納する儀式が同時並行で行われることになるため、両場面の間に簡易的な目隠し状施設を想定した。遺構としてはこのような施設が確認されていないので、遺構には残らない程度の細い杭を打ち込み、これに骨組みを縛り付ける簡易的な施設とした。

3) 墳裾周辺施設の復元

墳裾周辺においては、発掘調査で確認された施設は存在しない。後世に破壊された地形もあり、なんらかの施設が存在した可能性も否定できないが、裳屋等の特別な施設は設置せず、参列者の集合場所周辺に若干の平坦な盛土地形を、東側テラスに仕上げの貼石作業のための石材集積地を想定するのみに留めた。

5. 人物群の復元

1) 登場人物の設定

模型上には、基本的な場面設定において想定した四つの人物群、つまり、墓上で棺を納めつつある人物群、墓上で柱を立てつつある人物群、墳裾部周辺へ各地から集合しつつある人物群、墓壙埋土のための土運びをする人物群などを配置した(PL.5)。

墓上で棺を納めつつある人物群については、儀式をとりしきる新たな魔王・女王、そこに参加する親族や彼らに奉仕する人物たちが存在したと考えられる。後者の役職としては、王の付き人、儀式の場を守る兵士のほか、儀式を演出する音楽を奏でる人物などを想定した。

墓上で柱を立てつつある人物群は、作業の指揮者と実際に作業を行う人物からなると考えた。この作業は儀式の一環として行われる重要なものと考え、参加する人物群は一般の民衆ではなく、皆一定の地位をもった人物であったと想定した。

墳裾部周辺へ各地から集合しつつある人物群については、各地からの来客を迎える役割

の人物と発掘調査で確認された山陰・吉備・北陸系土器の故地である山陰の参列者、吉備の参列者、北陸の参列者などが存在したと考えられる。各参列者群には、出身地(クニ)の代表として高い身分の人物が派遣されたと想定した。

墓壙を埋め戻すための土運びをする人物群については、作業の指揮者と作業する人物が存在したと考えた。これらの人物群はその後の墳頂部盛土や貼石の仕上げなどを短時間に行うと想定すると、相当人数の動員が必要であったと考えられる。作業指揮者は一定の地位にあった人物であろうが、作業員はムラから動員された一般民衆と想定した。

その他、四方の突出部には兵士が立ち番をしたものとし、墳頂部の兵士たちとともに王の棺を運ぶ葬列の護衛を兼ねていたと想定した。

2) 登場人物の髪形

人物を表現した弥生時代の立体造形物の内、表現が写実的な西日本⁵の土製品を分類すると、頭の正面形が三角形、扇形、丸形のものが確認される。それらの資料から復元できる髪形とその復元根拠については以下のとおりである(深澤・佐古2009)。

三角形の頭部について見ると、香川県鴨部川田遺跡例などに確認される顔面装飾が『魏志』倭人伝に男性がしていたと明記される「鯨面」である公算が大きい。髪結い表現のないものが主流であることから、現代のソフトモヒカンのような髪形であったと想定した。同様の頭部表現は県内でも松江市西川津遺跡出土人面付土器(図6-1)にも確認される。

扇形の頭部について見ると、東日本においては基本的に女性像として表現されている。西日本例においては「鯨面」表現をしたものは一例もない。このことから、この髪形は女性を表現したものと考えられよう。大阪府目垣遺跡出土例(図6-2)などで確認される細かな刻目表現とその盛り上げ方を根拠に、髪の毛を左右に



図6 弥生人の頭部表現※各報告書・報告資料より転載
お下げ状に編み、これを左右から頭頂へと折り返して扇形に整えたものと想定した。

丸形の頭部について見ると、山口県綾羅木郷台地遺跡例（図6-3）などのように、「鯨面」が表現された資料が数多く認められる。このことから、これも男性の頭部を表現したと考え、五分刈りや剃髪の髪形を想定した。

考古学的には以上3種の髪形が想定されるが、その他の髪形も存在したであろう。髪を結わない伸びたままの髪形や、紐で簡単に束ねただけの髪形など、一定の階層以下の人物には異なるバリエーションを想定した。

3) 登場人物の衣服

『魏志』倭人伝には、衣服について「男子は皆露紺し、木縄を以て頭に招け、その衣は横幅、ただ結束して相列ね、ほは綻うことなし。婦人は被髪屈紺し、衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きてこれを衣る。」とある⁷⁾。

この記述から読み取れる男性衣服の解釈については諸説あり、大きくは『梁武帝書卷』(6世紀)に描かれた倭国使の図に準じた形態であるとする井筒雅風氏らの説（図7、井筒1986、深澤・佐古2009ほか）と、貫頭衣のバリエーションであるとする武田佐知子氏らの説（猪熊1964、武田1984ほか）に大別される。ここでは前者を採用し、男性の衣服は長い布を腰と肩に巻きつける形態と想定した。また、男性が頭に「招け」た布については、鉢巻状のものを想定した。

女性の衣服を貫頭衣とすることについては、

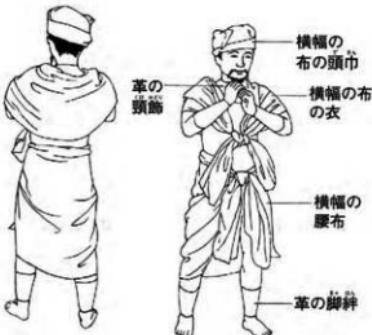


図7 井筒雅風氏復元の男性衣服

ほぼ異論のないところであろう。貫頭衣の細部形態にも諸説あるが（猪熊1964、武田1984ほか）、頭が通る部分を残して2枚の長い布を並べて縫り合せ、それを半分に折った形態を採用した。ただし、佐原真氏らも指摘しているように（佐原2003）、弥生人骨の腕部に付着した布の遺存例（福岡県吉ヶ浦遺跡）や、縦糸方向に直交した縫い合わせの痕跡の資料（佐賀県吉野ヶ里遺跡）などから、貫頭衣に袖部を縫製した衣服も存在した可能性が高い。よって、女性衣服のバリエーションとして袖付の衣服も加えることとした。

なお、衣服に使用された布は麻・絹を想定し、幅30cm程度の布を縫り合せたもの（角山幸洋1981）とした。絹織物については多彩な染色が可能であった（吉岡・深澤2009）と考え、色彩にもバリエーションを想定した。

4) 登場人物のイレズミ・化粧

『魏志』倭人伝には、「男子は大小となく、皆黒面文身す」「朱丹を以てその身体に塗る、中国の粉を用うるが如きなり」とある。つまり、倭人は顔や体にイレズミや赤い化粧をしていたと解釈できよう。特にイレズミについては男性の習俗として記述されている。

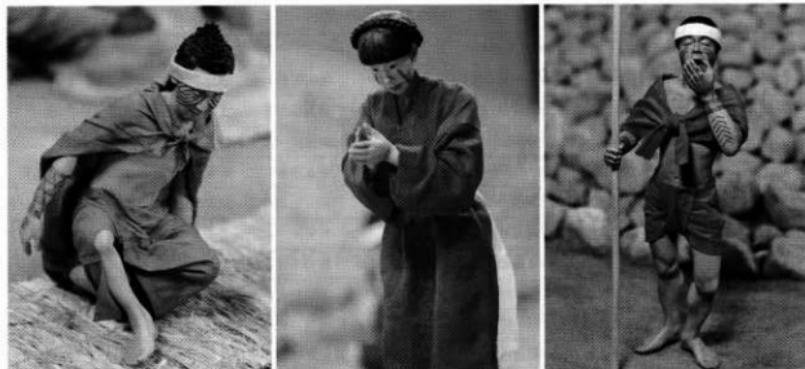


図8 復元された弥生人の姿

弥生時代後期における顔のイレズミについては、瀬戸内地方と東海地方を中心に共通パターンをもった鯨面表現が絵画土器などに見られ、地域を越えた最も一般的なイレズミパターンとして注目されている（設楽1999）。

吉備地域でも一倉遺跡例など複数の資料で同様の鯨面表現が確認されており（設楽1999）、吉備出身の男性にはこれらの資料に準じたイレズミが施されていると想定した（図8左）。

山陰地方では加茂岩倉遺跡出土銅鐸絵画（角田はか緑2002）等の資料が存在する。ただし、山陰の例は弥生時代中期に限られ、資料の生産地も確定されていない。一倉遺跡等の表現とも異なる。山陰の人物については不明な点が多いものの、当該期には顔のイレズミ習俗が廃れ、高齢男性にのみ簡易なイレズミが施されているものと想定した。

北陸地方にも当該期の良好な資料が存在しないが⁶、糞置遺跡の人面付土器（弥生中期、久田2006）、矢田野エジリ古墳の人物埴輪（古墳後期、小松市教育委員会1992）に見られる顔の線刻⁷をイレズミとして捉え、この形態に準じたイレズミと吉備地域同様のイレズミとが混在したスタイルのものが施されているものと想定した。

以上のように、山陰地方、北陸地方における顔のイレズミについては、はなはだ根拠薄弱な復元とならざるを得なかった。さらに、体のイレズミ表現と赤い化粧表現については当該期の参考資料が皆無に等しく、弥生土器等に刻まれた文様や記号状の表現、古墳時代の人物埴輪の化粧表現、民俗例のイレズミ表現などを意的に選択して復元することとした⁸。赤い化粧については、当該期にイレズミの習俗が薄れたと想定した、各地の女性や山陰地方の男性を中心に行っている。根拠薄弱な点が誤解を招く可能性も指摘されたが⁹、弥生世界のアリアティーを演出するためにはこれらの復元が必要不可欠であるとの考えのもと、上記のイレズミ・化粧表現を行うこととした。

6. 器財等の復元

その他、模型内には数多くの器財等が存在するが、これらについては紙面の都合上、全体的な復元方針の概要を記すにとどめ、個々についての詳細な復元根拠は略した。個別の参考資料等¹⁰については表1の一覧を以って報告にかえさせていただきたい。

表1 主な復元器財一覧

No.	器財名	復元参考資料等	備考
1	木製儀杖	山持遺跡、下長遺跡出土品ほか	新魔王所持品 赤黒漆塗にアレンジ
2	鉄劍	西谷3号墓、青谷上寺地遺跡、瓜生堂遺跡出土品ほか	新魔王所持品 3号墓同等品を想定
3	胸飾り	西谷3号墓、西谷2号墓出土品	新魔王・女王所持品 3号墓同等品を想定
4	腕輪	西谷2号墓出土品	新女王所持品 新女王・魔王を2号墓被葬者と想定
5	木製团扇	姫原西遺跡、比恵遺跡出土品ほか	新女王所持品 比恵遺跡溝の赤黒漆塗にアレンジ
6	木製腰掛	山持遺跡、青谷上寺地遺跡出土品ほか	新魔王・女王所持品 黒漆塗にアレンジ
7	蓋	天神遺跡、青谷上寺地遺跡出土品、形象埴輪資料ほか	新魔王從者所持品
8	木製琴	青谷上寺地遺跡出土品ほか	墳頂祭祀從事者所持品
9	木製琴板	姫原西遺跡出土品	墳頂祭祀從事者所持品
10	木製楯	青谷上寺地遺跡出土品ほか	墳頂部衛兵所持品
11	鉄矛	上田原遺跡、塙山遺跡出土品、「常陸國風土記」逸文ほか	衛兵所持品 柄に帯状にはためく布をアレンジ
12	木製短甲	伊場遺跡、雀居遺跡出土品ほか	墳頂部衛兵所持品 裝飾省略
13	羽根飾り	清水風遺跡出土絵画ほか	墳頂部衛兵所持品 ヤマドリの羽根想定
14	旗1	東殿坂古墳出土絵画、「洛神賦図」、「常陸國風土記」逸文	新魔王・女王背後の衛兵所持品 勢列先頭の人物と想定
15	旗2	「洛神賦図」、「常陸國風土記」逸文ほか	北西突出部衛兵所持品 勢列最後尾の人物と想定
16	旗3	諏訪大社御柱祭祭祀具ほか	土木作業指揮者所持品
17	山陰土器	西谷3号墓出土品	山陰の参列者所持品
18	吉備土器	西谷3号墓出土品	吉備の参列者所持品
19	北陸系土器	西谷3号墓出土品	北陸の参列者所持品
20	木製容器	天神遺跡、姫原西遺跡、青谷上寺地遺跡出土品ほか	来客接待用酒器として合子、椀を想定
21	モッコ	「松嶺天神縁起」「当麻曼荼羅縁起」ほか	作業員所持品 土・石の運搬具
22	籠	青谷上寺地遺跡出土品、民俗資料ほか	作業員所持品 土・石の運搬具
23	木製轍	姫原西遺跡出土品ほか	一部は儀式用として黒漆塗を想定
24	石杵	西谷3号墓出土品	墳頂最終盛土後に墓壇上設置される石 3個
25	木製台	姫原西遺跡出土品ほか	石杵を置く台として想定

復元器財は発掘調査で確認されたものだけではなく、先に設定した登場人物とその動きなどから想定されるものも選定した。

基本的に王の所持品の一部と祭祀に使用された土器、および石杵等については、西谷2・3号墓出土品を、他の器財については山陰地方の遺跡出土品を優先して参考資料としたが、これらだけでは不足する情報については、全国各地の遺跡出土品、国内外の文献資料、絵画資

料、民俗資料等も必要に応じて参考とした。

7.まとめ

模型製作にあたっての検討は多岐にわたり、これまでに述べてきた項目以外にも模型場面前後の詳細なストーリー設定、人物一体一体の詳細設定、動植物の設定、これらの設定に伴う配置・動き・表情など、それこそ多種多様な検討

を重ねた。本稿で記述できなかったこれらの点については、別の機会に述べてみたいと思う。

遺跡の復元模型制作は、限られた断片的な情報を探り合わせ、更にそこに生じた空白を矛盾なく埋めていくことによって実現される。1/10という大スケールで遺跡を復元し、しかもそこには存在した人々の姿まで再現するためには、膨大な情報の空白を埋めなければならない。

それは、私たちにとって困難を極めた仕事であった。関係する地域の発掘調査だけでは知りえない情報については、他の遺跡の資料を、更に不足する情報については、民俗資料や『魏志』倭人伝をはじめとする歴史資料など、あらゆる情報の収集を試みた。もちろん、全ての復元に十分な根拠を揃えることは不可能であり、想像に頼る部分も多々あったが、少なくとも収集した情報に矛盾しない合理的なイメージのみを選択したつもりである。

こうした過程を経て作成された模型は、単なる弥生墳丘墓祭祀の再現に留まらず、現状で考えられる弥生世界の習俗をかなり忠実に再現することができたと考えている。

この模型を通して、私たちが考える「出雲王」と弥生墳丘墓での祭祀、そして弥生時代のイメージをより多くの方々に伝えることができれば幸いである。

最後に、本模型の製作は、作業にご協力いただいた皆様はもちろんのこと、西谷3号墓の発掘調査をされた島根大学考古学研究室の皆様をはじめ、多くの先人達の調査研究成果なしには実現し得なかったものである。記して感謝の意を表したい。

付記 模型制作の経緯

最後に、模型制作経緯の概略を以下に記しておく。出雲弥生の森博物館建設計画の具体化に向けて2005年（平成17）10月に「出雲弥生の森博物館整備・活用検討委員会」が設置された。2007年（平成19）5月からは委員会内に展示専門部会を設けて2008年（平成20）11月まで延べ8回の詳細な展示方針検討を行った。この間に展示実施設計業務及び展示修正設計業務を㈱丹青社に委託し、展示専門部会の意見を反映した展示設計書を作成した。この展示設計の中核的な展示製作物として位置づけられたものが、西谷3号墓1/10模型である。

2009年（平成21）1月に㈱丹青社と展示工事契約を締結した後は、設計細部のディテールを検討・確認するために渡邊・花谷・三原・須賀・高橋を中心としたメンバーによる検討会議を重ねた上で、施工図作成を行った。

その後模型の各パーツが神奈川の模型製作業者で工場制作され、出雲弥生の森博物館に持ち込まれた後に最終仕上げが行われた。この間渡邊・須賀による工場検収作業を実施している。

出雲弥生の森博物館には2010年（平成22）1月に模型パーツが搬入され、設置、仕上げ作業、検索装置設置、検索ソフトインストール等を経て同年3月30日に引渡しを受けた。

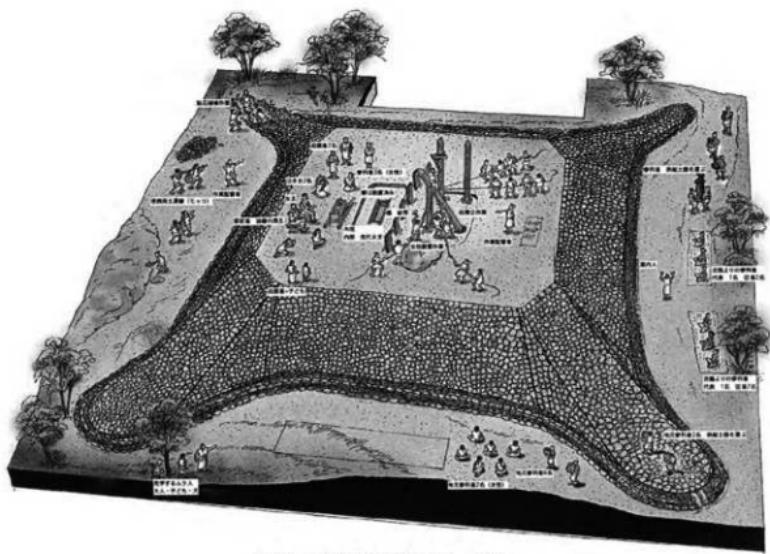


図9 展示設計段階のイメージ図

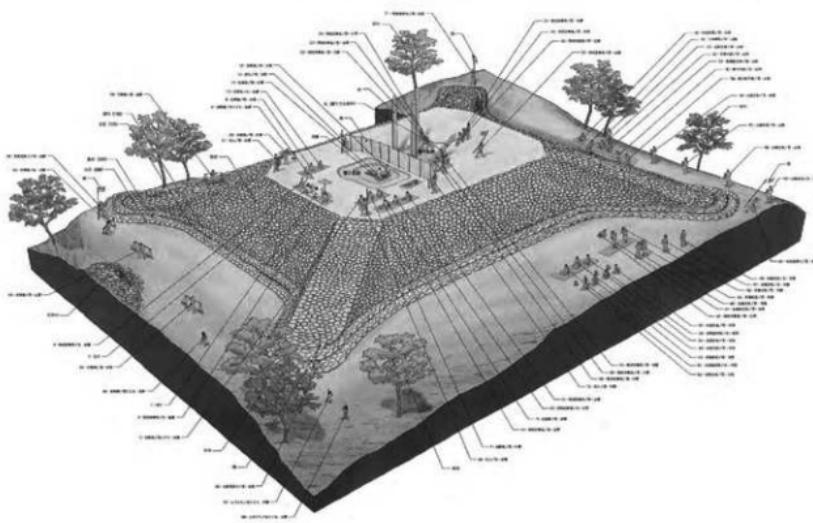


図10 施工図検討段階のイメージ図

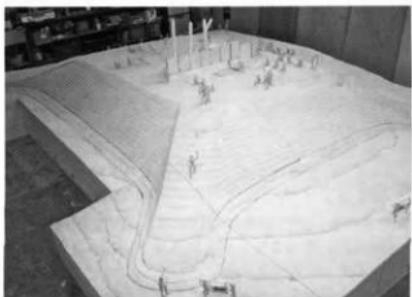


図11 工場製作状況



図12 パーツ搬入状況



図13 模型設置状況

【註】

¹ 土壙の規模は掘り込み面からの数値で計測されたものである。1主体・第4主体とも土壙の掘り込み面は地山面である。

² 第1主体と第4主体土壙埋土上の盛土と同様の土層は墳頂部の大部分で広域に確認され、出土した土器資料は全てこの土層の上から発見された。

³ 第1主体と第4主体の土壙上の盛土以前に埋葬された埋葬は他にも存在するようであるが、「第4主体→第1主体→その他の埋葬」の埋葬順序を想定し、設定シーン段階では、その他の埋葬に伴う土壙や棺は存在しないものとした。

⁴ 実際には地山面が傾斜しているため土壙埋土上の盛土高は第1主体で0.4m前後、第4主体で0.15m前後と差があるが、模型制作に当たっては地山掘り込み面レベル45.8m、土壙埋土上の盛土高0.2mと統一して復元した。

⁵ ここでは近畿地方以西を西日本として捉えた。

⁶ 例外として、東日本で愛知、長野に類例のある縄

文時代晚期の後頭部結髪土偶、西日本で京都府温江遺跡の人面付土器に後頭部髪結い表現がある。

⁷ 「魏志」倭人伝説下し文は、石原道博編訳1985『[新訂]魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭國伝』岩波書店（初版1951）から引用した。以下、同じ。

⁸ 両遺跡出土品の人面表現に共通して見られる口周りのひげ状表現を鯨面の地域的特徴と仮定してこれをアレンジした。

⁹ 体のイレズミ表現についてはアイヌや沖縄諸島の民俗例に倣って施される位置を手の指・甲から肘を中心とした範囲とした。赤い化粧については古墳時代の人物埴輪を参考に施される場所を顔や首から胸を中心とした範囲とした。

¹⁰ 器財についての参考資料は多岐にわたるため、考古資料については参考とした資料の出土遺跡、絵画・文献史料についてはその名称のみを一覧に記すに留め、個々の参考文献については割愛させていたいた。

参考文献

- 出雲市文化財課編 2006『国指定史跡 西谷墳墓群』（遺跡パンフレット）
- 井筒雅風 1989『原色日本服飾史』光琳社出版
- 猪熊兼繁 1964『古代の服飾』至文堂
- 角田徳幸・山崎修編 2002『加茂岩倉遺跡』鳥根県教育委員会・加茂町教育委員会
- 小松市教育委員会編 1992『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』
- 坂本豊治ほか 2006『西谷墳墓群－平成14年～16年度発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 佐原 真 2003「5髪と衣」『魏志倭人伝の考古学』岩波書店、64～82頁
- 設楽博巳 1999「鯨面土偶から鯨面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館、185～201頁
- 武田佐知子 1984「『魏志』倭人伝の衣服について－「横幅」衣・「貫頭」衣の位相」『女子美術大学紀要』14号、女子美術大学、42～68頁
- 角山幸洋 1981「織物」「三世紀の考古学」中巻、学生社、272頁
- 久田正弘 2006「北陸地方の絵画資料」「原始絵画の研究 論考編」、六一書房、165～192頁
- 深澤芳樹・佐古和枝 2009「弥生男性の髪形と衣服」『第9回弥生文化シンポジウム 妻木晚田の人々が愛した色～弥生時代の色彩世界～』鳥取県教育委員会、5～11頁
- 松本岩雄ほか 2003『宮山IV号墓の調査』『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財センター、82～105頁
- 吉岡幸雄・深澤俊樹 2009「茜と藍、絢青緑の考古学」『國文學』第54巻第6号、学燈社、104～115頁
- 渡邊貞幸編 1992『西谷墳墓群の調査（I）』『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室 II部
- 渡邊貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『鳥根考古学会誌』第10集、鳥根考古学会、153～160頁
- 渡邊貞幸 2003「四隅突出型墳丘墓の突出部」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁
- 渡邊貞幸 2011「よすみ」の終焉—古墳時代への転換—『出雲弥生の森博物館市民講座「四隅突出型墳丘墓の謎を解く」』③、資料

西谷15・16号墳について

花谷 浩

『出雲弥生の森博物館研究紀要』
第1集, 29-43頁, 2011年3月

1.はじめに

西谷墳墓群（島根県出雲市大津町）は、出雲平野の南辺、斐伊川左岸（西岸）の丘陵上に広がる遺跡である。6基の四隅突出型埴丘墓を含む弥生墳丘墓および古墳、合計27基と石棺墓3基・土坑墓2基から構成される¹。また、同じ丘陵斜面には3群20基ほどの横穴墓も確認されている。弥生時代後期（2世紀後半）から古墳時代終末期（7世紀前半）にまでおよぶ多数の墳墓が密集する遺跡地である（図1）。

西谷墳墓群の弥生墳丘墓と古墳は、四隅突出型埴丘墓の1～4・6号墓が並ぶ西側丘陵、最大規模の9号墓がある北側丘陵、7号墳など10基の古墳が点在する中央丘陵、12号墳など6基がある南側丘陵、の大きくは4地区に分かれている。

15号墳と16号墳はともに中央丘陵の東南部に位置していた（図1）。西谷15号墳と16号墳は、農道建設とともに事前調査として1991年と92年に発掘調査され、報告書も刊行されている（湯村ほか1993）。これによると、15号墳は一辺約15m・高さ約0.9mの方墳で、墳丘上に東西2.6m×南北0.7m×深さ0.4mの長方形土坑を確認した。木棺直葬かと推定されている。この土坑の上面および墳丘東西の溝から、鉄刀子1点、須恵器杯蓋1点、土師器数点が出土した。葺石および埴輪はない。

16号墳は、直径11m・高さ0.5～1mの円墳で、東西方向に箱形石棺が設置されていた。石棺の蓋石は破壊され、石棺内部も搅乱を受けていたが、石棺外の南側、側石に接したところから鉄器4点が出土した。土器や埴輪は出土しなかった。報告者は「5世紀後半から6世紀初頭のもの」と推定した。

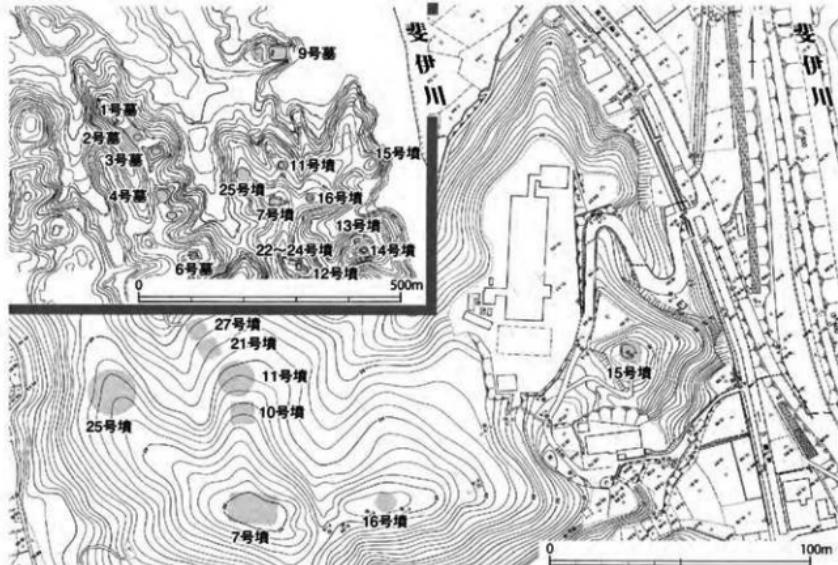


図1 西谷墳墓群と15・16号墳の位置（上：1/10,000、下：1/2,000）

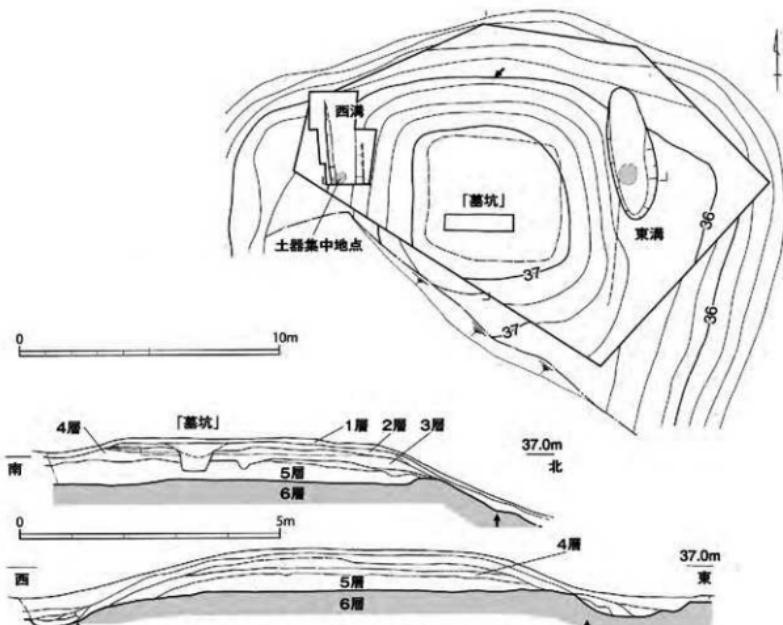


図2 西谷15号墳墳丘測量図(1/200)と土層断面図(1/100)

この16号墳については、その後、遺跡全体の範囲および内容確認調査のうちに刊行された報告書(坂本ほか2006)では、出土した鉄製土掘り具(タビ)の類例などから「古墳時代前期末～中期前葉頃」と考えた(坂本ほか2006, 153頁)。当初の報告よりは約100年も古い年代であり、西谷墳墓群の形成過程を復元するにあたっては、看過しがたい年代差である。

西谷15号墳と16号墳は、西谷墳墓群では全面的な發掘がおこなわれた数少ない古墳である。この2基の古墳を改めて検討してみたいと思う。

2. 西谷15号墳

墳形と規模(図2) 15号墳は調査前の測量図(報告書第4図)でも方墳と判断できる。その規模を報告書は「一辺約15mの方墳の形状を比較的良好に残していた。高さは0.9mを測る。」とするが、その根拠は示されていない。

調査では墳丘の東西に南北溝が見つかった。西側の南北溝(以下「西溝」)について報告書本文では「幅1.2m」だが、調査後の墳丘平面図で計ると0.9m、溝内の土器出土状況図では1.25m。溝幅が図面によって各々違う。

これは東側の南北溝(以下「東溝」)も同様で、本文では「幅0.8m」、墳丘平面図では最大「1.5m」、土器出土状況図では「0.85m」である。本文の記述はともに土器出土状況図の数値が近い。ただし、溝幅をもっと正確に表現したのは墳丘東西断面図と思われる。これによると西溝は幅1.15m(+α)、東溝は1.7mである。溝幅が平面図に正確に表現されていないとなると、墳丘平面図から規模を計測するのはやや不安だ。

そこで、再び墳丘を東西方向に掘り抜いた東西断面図を見る(図2下段)。この図によると、西溝と東溝の距離(溝底から墳丘への立ち上がり(▲)相互の距離)は、10.2mである。これを15号墳の東西規模とみなすのが妥当である。

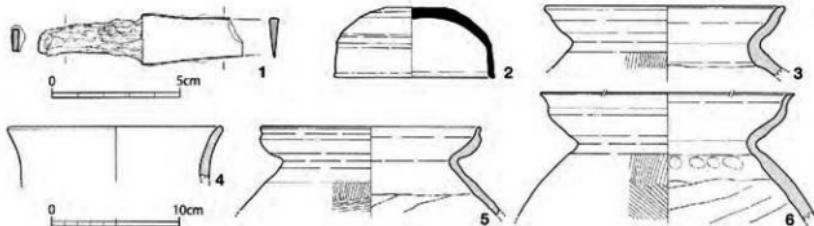


図3 西谷15号墳出土遺物実測図（刀子：1/2、土器：1/4）

墳丘西南部は壊されていたので、南の墳裾は不明。北側については南北の土層断面によれば、「墓坑」から北へ5.8mのところに地山の傾斜変換点がある。報告書では「北側は墳丘が流出している可能性があり」としているが、この北側の傾斜変換点（図2（↑））の標高35.85mは、東溝の溝底の35.98m、西溝の35.78mと整合的である。この変換点を北側の墳裾とみてもよいのではないか。「墓坑」との距離（5.8m）を2倍し、南北規模「11.6m」という数値を得る。

また、頂部の調査時の標高は37.36m、表土を除くと37.28m（土層断面図による）だから、墳丘の高さは1.3～1.5mである。

以上、15号墳の規模は、東西10.2m×南北不明（11.6mか？）×高さ1.3～1.5mである²。

墳丘構築の方法 報告書ではいわゆる地山（第6層）を平らに削平したのち第5層（明褐色粘質土層）から第3層（赤褐色粘質土層）を積み上げ、さらに第2層（黄褐色粘質土層）でおおつて完成させた、としている。「墓坑」は第3層上面からの掘りこみである。

第4層（暗褐色粘質土層）については、報告書でも古墳築造当時の「旧表土」の可能性にふれられているが、「その可能性は薄いと思われる」とある。しかし、写真を見ると、この第4層は基本的にその下層の第5層と不整合であり、盛土を重ねたように見えない。報告書では「地山の直上に第4層が確認されるところもあること」を「旧表土」とみなさない根拠としている。それは墳丘中心から西側の土層断面で、それ以外では第4層が第5層の上には水平堆積している³。「旧表土」の可能性を考えたい。

出土遺物（図3） 鉄器と土器がある⁴。

1は鉄刀子。両闇で、関部の刃幅は2.1cm。莖は長さ4cmあり、柄の木質が残っている。刃部には欠損がある。刃部に木質の付着は認められない。現存全長8cm。「墓坑」出土。

2は須恵器杯蓋。天井部が丸く高い。体部と天井部の境の稜線は鋭くない。口縁端面には浅い凹線がある。天井部の半分ほどの範囲にヘラケズリがあるが、中央にはケズリがおよばず、ヘラ切りの痕跡がある。口径13.0cm・高さ5.8cm。西溝出土。

3は土師器壺。口縁部はゆるく屈曲して広がる。胴部の調整は外面タテハケ、内面ヘラケズリ。口径18.8cm。「墓坑」出土。

4は土師器直口壺または甕。口縁部外面にタテハケがあるようだが摩滅のため不詳。口径16.8cm。西溝出土。

5は土師器壺。口縁は内湾し端部が屈曲する。胴部の調整は外面がタテハケ後にヨコハケ、内面がヘラケズリ。口径17.3cm。西溝出土。

6も土師器壺。口縁端部がやや長く延びて、端部に面がある。胴部の調整は外面タテハケ後にナナメハケ、内面ヘラケズリ。口径不明だが、20cm前後だろう。東溝出土。

このほか、東西の溝から赤彩のある土師器高杯が出土しているが、図化できなかった。

小結 西谷15号墳は、東西10.2m×南北不明（11.6mか？）、高さ1.3～1.5mの方墳である。木棺を直葬していたと推定される。この墳丘規模は、西谷墳墓群の南側丘陵にある13号墳や14号墳など（いずれも一辺10m）と近似し、西谷墳墓群ではもっとも小さい古墳である。

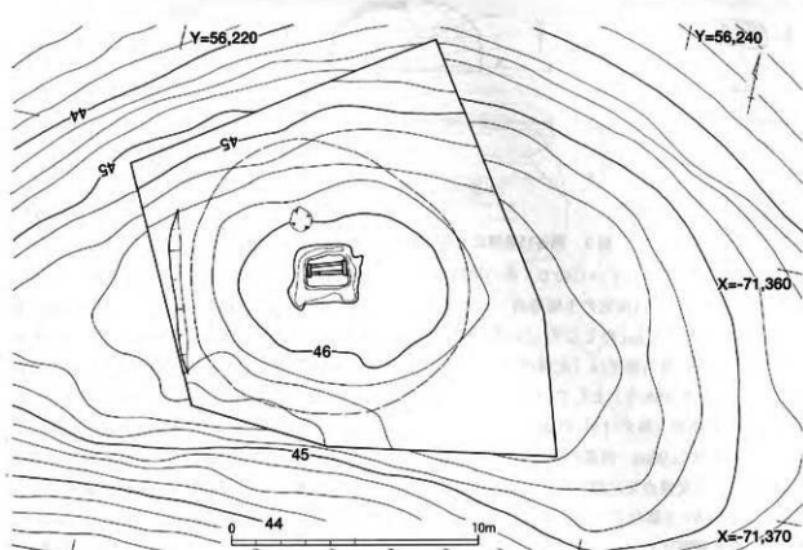


図4 西谷16号墳墳丘測量図 (1/200)

3. 西谷16号墳

既報告のように、直径11m・高さ0.5~1mの円墳（図4）。墳丘に蓋石や埴輪などはない。箱形石棺と副葬品について述べる。

箱形石棺（図5） 硬岩と思われる石材を板状に切削加工した「切石」を組み合せた箱形石棺である。外法で長さ（東西） $1.65m \times$ 幅 $0.3m \times$ 高さ $0.3m$ 、内法 $1.36m \times$ 幅 $0.22\sim0.31m \times$ 深さ $0.3m$ ある。東側の方の石棺幅が広く、底面もわずかに高いので頭位は東であろう。小口の石材が長辺の側石を挟み込む構造で、北側の側石は1枚、南側は2枚である。小口の石材の外側には切石や砾を使った控え積みがある。また、副葬品が置かれていた南辺を除く三辺の石材裾は、粘土で固定されていた。底石も礫敷きもない。蓋石はすでに完全に破壊されていたため、形状や枚数は不明。棺内には副葬品も人骨も残されていなかった。

石棺の掘形は、東西 $2.8m \times$ 南北 $2.3m$ の規模をもち、四周に浅い溝が掘られている。

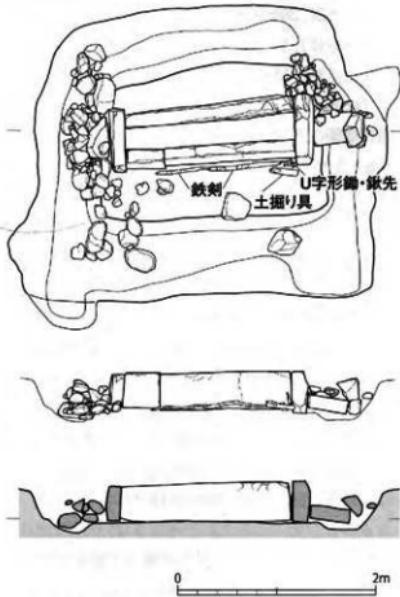


図5 西谷16号墳箱形石棺および遺物出土状況実測図 (1/40)

副葬品(図6・7) 鉄剣2振り、鉄製U字形
釣・鍔先、鉄製土掘り具がある。鉄剣は短剣と
長剣で、ともにS字形に曲げられている。

a. 短剣(図6-1) 差渡し長43.0cm(復元全
長43.8cm)、復元刃部長35.8cm、刃幅2.4cm、刃
部厚0.5~0.3cmの細身の剣である。先端から約
11cmと約24cmのあたりの二ヶ所で折り曲げられ
ている。刃部・茎とも木質は残らない。

茎は長さ8cm、幅1.5cm、厚さ0.25cmである。
茎の両側面は直線的でなく、一方はゆるやかに
内反りして他方は外反りする。そして、外反り
する側の闊が反対側のそれより若干深い。茎の
尻近くには目釘孔がある。目釘は木釘であろう
か。現重量127.6g(保存処理後)。

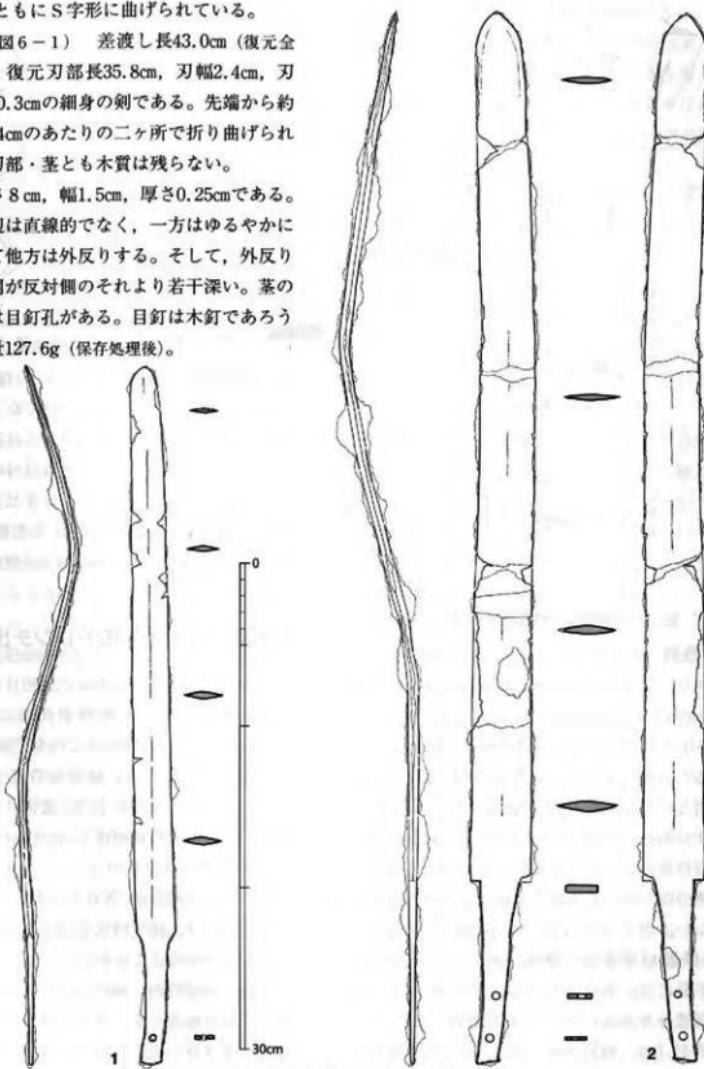


図6 16号墳出土鉄器実測図1 (1/3)

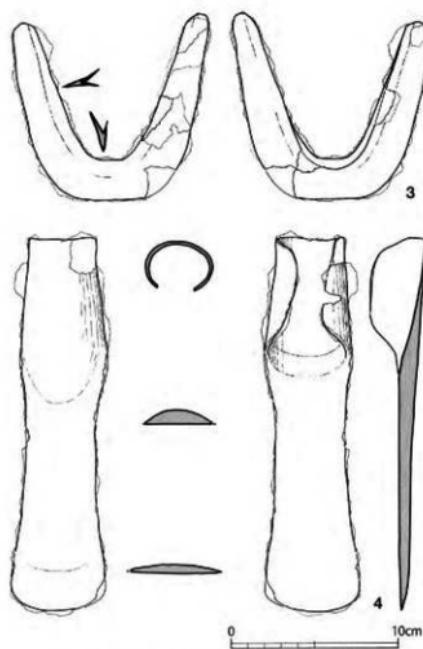


図7 16号墳出土鉄器実測図2 (1/3)

b. 長剣 (図6-2) 差渡し長63.0cm(復元全长64.0cm), 刀部長52.9cm, 刀幅3.6cm, 刀部厚0.6cmある。茎は長さ11.1cm, 幅は2.4~1.4cm, 厚さ0.4~0.2cmある。先端から約20cmと約40cmのあたりの二ヶ所が折り曲げられているのは、短剣と同じである。茎の尻に近いほうに目釘孔が2つある。目釘は鉄製ではない。長剣の茎も直刀の茎のごとく一方に反っており、外反りする側の闇が深い。なお、表面に木質の残存を認めない。現重量328.3g(保存処理後)。

c. 鉄製U字形鎌・鎌先 (図7-1) 全体にV字形に近い形をしている。中央部(先端)の袋部は一方が深いので、こちらが表であろうか。全長11.0cm, 幅11.8cm, 現重量87.5g(保存処理後)。

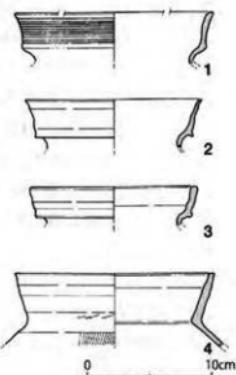


図8 16号墳東方地区出土土器 (1/4)

d. 鉄製土掘り具 (図7-2) 一端に長さ約7cmの袋部を設け、先端部だけでなく刃部の両側面にも刃を付けた鉄製品である。刃部先端部は凸レンズ状の断面だが、それ以外の刃部断面は三日月形である。韓半島で「タビ」とよばれる農工具の一つ。全長22.5cm, 刀部幅5.6cm, 袋部幅5.2cm, 現重量319.8g(保存処理後)。

4. 西谷16号墳東方のトレーナー出土品

西谷16号墳とその周辺は、当初「西谷墳墓群第3地点」として試掘調査がおこなわれた(1991年10月)。報告書ではこれを「第1調査区」(第3図)と改称した。16号墳の東方に5ヶ所のトレーナーを入れたようで、遺物には「西谷3 site 4T」のラベルが付く。日付は1991年10月。これが第3地点のものらしい。「4T」は「第4トレーナー」だろうが、どれなのかはわからない。

この中には、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片がある。これを図示しておく(図8)。

1は、口縁外面に擬凹線紋のある複合口縁の壺形土器口縁部。2・3は外面に施紋のない口縁部。4は直口壺。これら以外に、7世紀前半から中頃の須恵器杯身などもある。

5. 西谷15号墳小論

西谷15号墳の須恵器杯蓋は、出雲1期、陶邑高藏47号窯（TK47）型式相当のものである（大谷1994、田辺1981）。西谷墳墓群でこの時期の須恵器を出土した古墳はほかにない。

出雲平野の遺跡で出雲1期の須恵器を出土する例はそう多くはない。松山智弘や池淵俊一の論考（松山1991、池淵2008）によりつつ、その概要を地域ごとに述べてみよう⁶。

平野北部（旧斐伊川右岸） 山持遺跡（出雲市西林木町）では、VI区の「土器群1」に須恵器杯蓋（陶邑TK47型式？）、「土器群71」に須恵器蓋杯・無蓋高杯・有蓋高杯（陶邑高藏208号窯（TK208）型式）がある。共伴した土師器は、前者が松山IV期新、後者が松山IV期古。またVII区の溝SD01からは須恵器蓋杯・無蓋高杯・はそうが出土した（内田ほか2007）。陶邑高藏23号窯（TK23）型式から陶器山15号窯（MT15）型式までのものを含む。青木遺跡（出雲市東林木町）の包含層からも須恵器把手付椀・台付椀と陶質土器が出土した（中川ほか2008）。

平野北部（旧斐伊川左岸） 矢野遺跡（出雲市矢野町）の溝SD3042からは、陶邑高藏73号窯（TK73）須恵器無蓋高杯が出土した。これは出雲平野の出土須恵器としては最古型式である（三吉2010）。松山III期の土師器がともなう。ほかにも井戸SE2197の須恵器はそう（TK208型式）や井戸SE2145の須恵器蓋杯（TK23型式）がある（坂本ほか2010）。

矢野遺跡の西方にある井原遺跡（出雲市井原町）では、I区の溝SD03やSD05～07などから陶邑TK23～TK47型式の須恵器が出土した（岸ほか2002）。蓋杯・台付椀・有蓋高杯・甕などがある。松山IV期の土師器がともなう。

このほかには、中野清水遺跡（出雲市中野町）の6区13層10号溝から陶邑TK23型式の須恵器

杯蓋が出土した（久保田ほか2005）。中野清水遺跡では、これよりやや古い土器群（6区5号土器群：松山IV期古）では、須恵器がともなっていない。また、中野西遺跡（出雲市今市町）でも松山III～IV期の土師器で構成される土器だまり1・2や1区5層などに須恵器はともなわない（坂本2002）。中野美保遺跡（出雲市中野町）でも5世紀に遡る須恵器は出土しておらず、中野遺跡群での須恵器の普及状況は、井原遺跡や矢野遺跡とは違いをみせるようである。

平野南部（斐伊川左岸） 西谷墳墓群がある地域である。菅原II遺跡（出雲市船津町）では3区建物2から陶邑TK23型式の杯蓋が出土した（川原ほか2005）。長廻遺跡（出雲市大津町）IV区加工段5に松山IV期の土師器と陶邑TK47型式の須恵器蓋杯がある（萩・浅野2003）。

平野南部（神戸川流域） 遺跡によって須恵器の有無が顕著である。平地部の古志本郷遺跡（出雲市古志町）では陶質土器の出土は確認されるが松山IV期のHII区溝SD50に須恵器はなく（勝部2001）、遺跡全体としてもこの時期の遺構・遺物は希薄である。右岸の天神遺跡（出雲市天神町ほか）や築山遺跡（出雲市上塙治町）、左岸の田畠遺跡や下古志遺跡（出雲市下古志町）にもこの時期の須恵器が確認されない。

その一方で、神戸川右岸で丘陵地にかかる三田谷I遺跡（出雲市上塙治町）では、方形の竪穴住居跡が多数確認されている。陶邑TK208～TK23型式の須恵器（杯身・無蓋高杯）と松山IV期古段階の土師器を出土する住居跡SI01・06・17、および陶邑TK23～TK47型式の須恵器（蓋杯・高杯）と松山IV期新段階の土師器を出土する住居跡SI03・04・08・09などである（今岡・梶田1999）。溝や包含層からも同時期の須恵器が多数出土する（熱田ほか2000・鳥谷2000）。

神戸川左岸の南部丘陵裾に立地する遺跡では、御崎谷遺跡（出雲市東神西町）の土器だまり（今岡2009）や玉泉寺裏遺跡（出雲市東神西

町)に陶邑TK47型式の蓋杯がある(景山・曾田2008)。このほか、浅柄石棺墓(出雲市知井宮町)から出土した陶邑TK47型式の蓋杯が旧大社考古学会収集資料のなかにある⁸。

その他の地域 出雲平野東部では5世紀に遡る須恵器の発見はまれである。島根半島南麓部、旧平田市域ではこの時期の須恵器は見いだされていないようである。出雲平野東南辺の斐川町域では、大倉IV遺跡(斐川町学頭)がある(宍道1992)。1994・95年の発掘調査では竪穴住居跡1棟が見つかっている。土師器大型壺・直口壺・高杯と須恵器杯身が出土した(四方田ほか1997)。土師器は松山IV期、須恵器は陶邑TK208型式であろう。なお、小丸山古墳(斐川町学頭)ではかつて、直刀・冑と須恵器が出土したという(宍道1992)。あるいは5世紀に遡る資料なのかもしれない。

そのほか、上長浜貝塚(出雲市西園町)に陶質土器がある。これは4世紀に遡るであろう。ひろげ遺跡(出雲市大社町)は島根半島西端近く大社湾を望む海岸にある。陶邑TK47からMT15型式の須恵器(蓋杯・高杯・はそう)が出土した(杉原・大槻1997)。神西湖南岸では、中島遺跡(出雲市湖陵町西三部)(杉原ほか1987)と只谷Ⅲ遺跡(出雲市湖陵町二部鉢谷)から5世紀代の須恵器が出土している。いずれも少量である。
まとめ 一定量の須恵器が認められるのは、「出雲大川」河口部の井原遺跡と神戸川右岸南部の三田谷I遺跡くらいで、ほかの出土遺跡は蓋杯が出土する程度である。そして、神戸川下流域の遺跡(天神遺跡、築山遺跡、吉志本郷遺跡、下吉志遺跡、田端遺跡)では、出雲1期の須恵器が出土していない。「出雲大川」左岸の小山遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡、中野美保遺跡、中野西遺跡などでも同様である。意宇平野の夫敷遺跡や国府下層遺跡の韓式系土器と初期須恵器の出土状況と大きな違いを認めうる。

6. 西谷16号墳小論

16号墳の箱形石棺と出土鉄器を検討する。

箱形石棺 山陰地域の箱形石棺については、山本清の研究がある(山本1964・1971)。山本は「箱状一すなわち四壁や蓋を板状の石の平な面を主として用いて構成した棺」というほど、大まかな特徴を目安」として「箱式棺」を定義し、これを石材および空間(空間の大小と壁面構造)によって大まかに区分した。

石材はI:板状割石

II:板状に切削した切石

空間はA:長さ2m内外幅50cm内外ないし
それに準ずるもの

B:幅・高さ1m程度ないしそれ以上
それぞれ2つに分類され、その組み合わせにより4型式が設定された⁹。この山本分類では、16号墳の箱形石棺は「II A」にあたる。「山陰箱式棺表」によれば、同型式として、仲仙寺1・5号墳(安来市荒島町)や中ノ空古墳(松江市鹿島町)、西ノ奥古墳(松江市八束町)などが挙げられ、「中期後半から後期初頭ごろ」の年代が推定されている¹⁰。

箱形石棺の属性は、山本が掲げた2要素以外にもある¹¹。石材の組み方(小口石を側石の間に插入するか外に置くか)、蓋石の構成、底石の有無、石棺に対する掘形の大きさ、墳丘でのあり方(中心埋葬か周辺部のものか)などが想起されるが、今回はこれらの要素を考慮しつつ16号墳と類似する諸例を分析の対象としてみたい。

西谷16号墳の箱形石棺は、①切石を組み合せる、②小口石が側石を挟む(仮に「II形」とする)、③掘形が大きい、といった特徴がある。

まず、①切石を組み合せる、という特徴。山本の集成表でも、東は安来平野から出雲平野北部にいたる中海・宍道湖沿岸部に広く分布することがわかる。出雲平野部では北部の平田船川

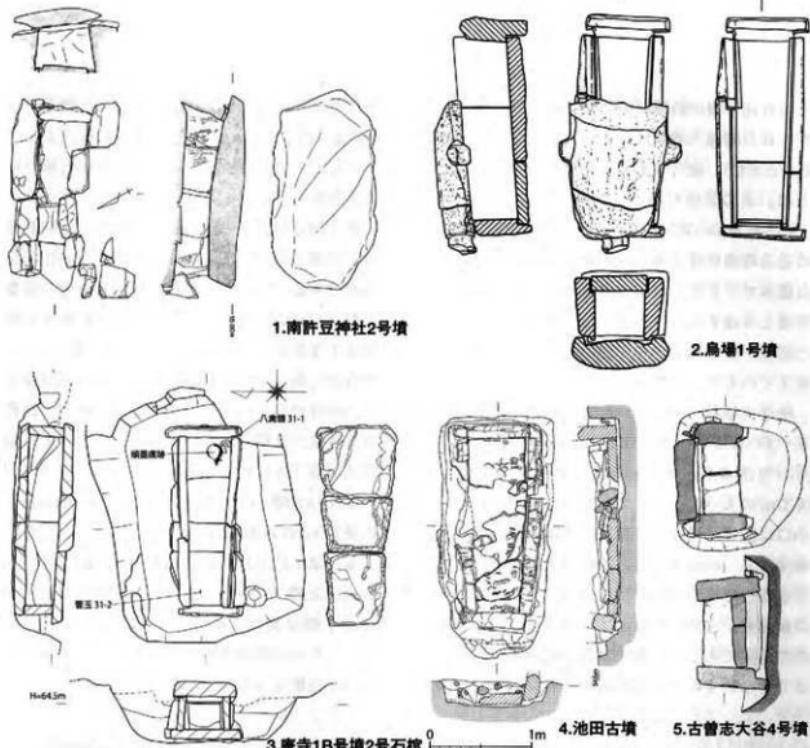


図9 箱形石棺の諸例 (1/50)

流域にある程度まとまるようである（山本1971、平田市誌編さん委1969）。

このうち左皿1号墳（出雲市国富町）は長頸鐵を含まないので中期後半より古いともみえるが、南許豆神社2号墳（円墳、出雲市小津町、図9-1）では長頸鐵でない鉄鐵に出土3期の須恵器蓋杯がともなう（原1990）。

平野南部には、池田古墳（出雲市上塩治町）がある（米田2001）。神戸川と斐伊川にはさまれた丘陵部の北端、標高約54mにある古墳（方墳か？）。箱形石棺（図9-4）は切石組みで、ガラス小玉・滑石白玉、鏡片、鉄劍、U字形鷺・鎌先などが出土した。中期中頃の古墳であろう。

次に②小口石が側石を挟むという、板材の組み合せ手法を見てみよう。

南許豆神社2号墳の箱形石棺は、小口板を側石の間に挟む組み合わせ（仮に「H形」とする）である。これに対し、池田古墳の場合は、幅の広い南東小口石は側石の内側に挟まれる「H形」だが、北西小口は「II形」である。

切石組みで「II形」の例として、鳥場1号墳（松江市玉湯町）がある（図9-2、近藤1970）。だが、本例は蓋石が舟形石棺の形状をしており、四辺には継掛け突起まで削り出してある。西谷16号墳の箱形石棺とは違いが大きい。古曾志大谷4号墳（松江市古曾志町、図9-5）も切石組「II形」の例だが、内法がごく小さい（足立・丹羽野1989）。周溝から出土した7世紀後半の須恵器から、終末期古墳の一例で、石棺は石室の小型化したものとみてよかろう。

西谷16号墳の箱形石棺の類例として、最近調査された庵寺古墳群（大田市仁摩町）がある（大庭ほか2010）。庵寺4号墳は 8.5×6 mの小型の方墳。その2号石棺は、内法で長さ $1.8m \times$ 幅 $0.45 \sim 0.6m \times$ 深さ $0.57m$ あり、組み合せに、はめ込みの溝を設ける点に差異はあるものの、切石組みで「II形」の組み合せという点は西谷16号墳と共通する。南東端に鼓形器台を加工した土器枕が置かれていた。報告書では「4世紀中頃までのもの」とする。

庵寺古墳群では、1-B号墳の2号石棺（図9-3）も切石組みで「II形」の組み合せである。内法の長さ $1.95m \times$ 幅 $0.45 \sim 0.7m \times$ 深さ $0.33m$ の大きさで、こちらには底石がある。東小口に頭骨が残り、中国製八禽鏡と碧玉製管玉（両面穿孔）が出土した。4世紀後半とされる。

庵寺古墳群の箱形石棺は、切石組みで「II形」の組合せが古墳時代前期まで通ることを示した点で重要である。出雲では類似例をあげることはできないものの、切石状に石材を加工する手

法は奥才古墳群（松江市鹿島町（三宅ほか1985・赤澤ほか2002））に見出すことができる。

そして、奥才古墳群は16号墳の箱形石棺の特徴③を検討する対比資料を提供する。

奥才14号墳は直径約 $18m$ の円墳。墳丘中央の1号箱形石棺（図10）は、「H形」の組み合せである。小口と長辺の石材は長方形ではないが、石材が一定の厚さになるよう両面とも切削加工されている。石棺の底には櫛が敷かれる。棺内から鏡2面と碧玉製紡錘車、鉄刀子が出土し、棺外からも石材に接して素環頭鉄刀、鉄長剣、鉄槍、鉄鎌、鉄鏟などが出土した。棺外副葬品の並べ方は西谷16号墳と似る。

奥才14号墳の1号箱形石棺は、長径 $4.4m \times$ 短径 $2.9m$ の掘形に入れてあった。先述した庵寺4号墳1号石棺の掘形は長径 $3.1m \times$ 短径 $2.5m$ 以上と推定され、いずれも大型である。西谷16号墳の長径 $2.8m \times$ 短径 $2.3m$ という掘形は、これら古墳時代前期の箱形石棺に共通するものと類推できる。

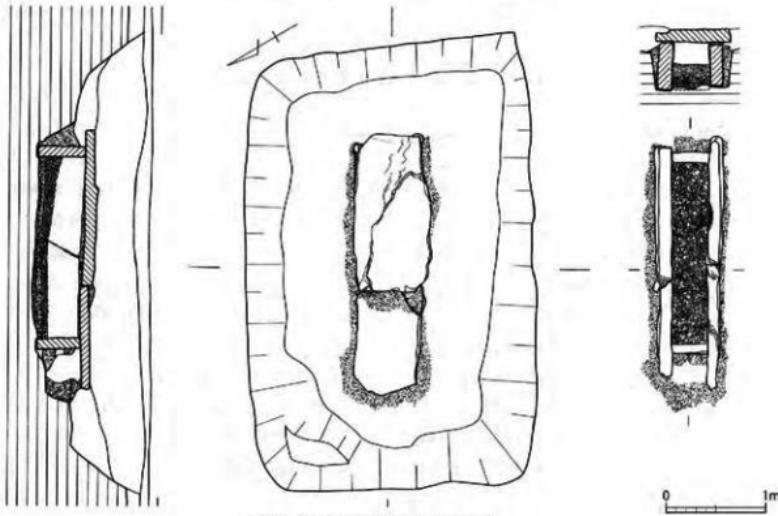


図10 奥才14号墳第1主体 (1/50)

副葬鉄器 西谷16号墳の短剣は、池淵俊一の分類によれば「ナデ角闘a直茎c」である（池淵1993）。また、長剣は「直角闘ナデ中細茎」にあたるが、「ナデ中細茎についてはほぼ浅直・斜角闘とのみ相關する」（池淵1993：50頁）とあるので、直角闘との組み合せは例外的である。池淵は短剣の「直茎c」は関形態による年代差はないので「直茎cグループ」としてまとまり、「4世紀前半ではあまり認められず、4世紀後半から目立つようになり、5世紀中葉まで認められる。」（池淵1993：49頁）とする。長剣については関形態との対応が通例とはことなるが、「ナデ中細茎」は「4世紀末～5世紀中葉の例が多」いとする（池淵1993：50頁）。

西谷16号墳の副葬品で特徴的なのは、鉄製U字形鋤・鋤先と鉄製土掘り具（タビ）である。

U字形鋤・鋤先の出雲における類例は、出雲市池田古墳（米田2001）や松江市金崎1号墳（藤原ほか1978）がある。池田古墳は先述したように箱形石棺の形態にも共通点がある。池田古墳は須恵器をともなわないが、金崎1号墳の出土須恵器は、陶邑TK208型式・TK23型式の型式的特徴をもっている（田辺1981：125頁）。

一方、16号墳の鉄製土掘り具（タビ）は、李東冠らの分類による「II c型式」に相当し、典型的な韓半島嶺南地域の形態を備える搬入品である。刃部先端近くに最大幅をもつ点で、馬山縣洞70号墳例など三国時代中期（ほぼ5世紀前後）のものと酷似する。李らによれば列島内でのタビの出土例は、西谷16号墳以外には京都府今林8号墳例しかないという（李ほか2008）。

まとめ このように、箱形石棺および副葬された鉄器を検討すると、西谷16号墳の築造時期は中期前半（5世紀前半）頃にあるとみられ、あるいは前期末にまで遡る可能性も残すであろう。

村上恭通と山村芳貴は、古墳時代の鉄製農工具の画期が前期後葉から中期前葉にあると考え

ている。16号墳のU字形鋤・鋤先のようなV字形をしたタイプは、韓半島の三韓時代後半期の弁韓・辰韓地域に特徴的とする（村上・山村2003）から、西谷16号墳の二つの農工具は、ともに韓半島の嶺南地域からの搬入品であって、まさに鉄製農工具の革新を示すものに他ならない。これは、吉備地域と比較しても遅れを感じさせない¹²。

7.おわりに

西谷墳墓群で発掘調査が行われた数少ない古墳（また同時に破壊された古墳もあるが）、15号墳と16号墳を取り上げて、再検討を加えた。「よすみ」（四隅突出型埴丘墓）にくらべれば、この遺跡を構成する古墳が言及されることはない。しかし、最も古いと考えられる西谷7号墳は長辺約25mの長方墳であり¹³、この規模は三角縁神獣鏡を出土した神原神社古墳（雲南省加茂町、29×25m）に著しくは劣らない¹⁴。

西谷墳墓群の古墳で7号墳に続くのは、前期末の21号墳（方墳）、中期の18号墳（方墳）と11号墳（円墳）である。

16号墳は11号墳に先行し、西谷墳墓群に造られた最初の円墳である可能性が高い。ここに半島製の農具が副葬されたわけだ。鉄製U字形鋤・鋤先は近傍では、池田古墳（出雲市上塩治町）にもあり（米田2001）、とともに須恵器をともなわないから、金崎1号墳（松江市）での副葬に先行すると推定できる。ただ、この前後には舟形石棺などの新たな石棺型式が導入されるが、それは採用されてはいない。

西谷15号墳での須恵器副葬についても、出雲平野部では早期の例と確認した。このように古墳時代中期から後期初頭の西谷墳墓群の性格を推考するに、本稿で検討した2古墳はたいへん重要な位置を占めていると思う。今後も、西谷墳墓群全容の解明を進めたい。

註

¹西谷墳墓群の弥生墳墓および古墳についてこれまですべて「西谷〇号墓」と呼ばれてきた。これは、1975年におこなわれた斐伊川放水路建設予定地内の分布調査成果の報告（西尾ほか1980）および出雲考古学研究会による踏査成果報告（出雲考古研1980）の呼称を踏襲したものである。前者の報告書で西谷墳墓群を記述した門脇俊彦は「なお、本稿で墳墓の語を用いたのは『西谷墳墓群』（出雲考古学研究会）に依ったもので他意があるわけではない。」（西尾ほか1980、80頁）としている。1980年頃は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年とともに、四隅突出型埴丘墓を「発生期の古墳」とみるのか弥生墳丘墓とみるのか、に関する議論が高まっていたものの、「墓」か「墳」かの問題は捨象されていた。もちろん、個別の墓の年代を決める資料が全くない状態であるから、致し方ないことはある。

その後、1983年から島根大学考古学研究室による測量調査および3号墓の発掘調査がおこなわれた。さらに1998年以降に出雲市がおこなった西谷墳墓群全域に対する測量調査および試掘調査により、個別の墓の年代はかなり判明したといってよい（渡辺ほか1992、坂本ほか2006）。

出雲弥生の森博物館の展示を企画する段階で、「弥生時代の墓＝埴丘墓（墳墓）」と「古墳時代の墓＝古墳」とを整理する必要が生れた。西谷墳墓群の墓だけを弥生時代であろうと古墳時代であろうと「〇号墓」と呼称するのは、見学者に無用の混乱をきたすと思われた。そこで調査成果をもとに次のように時代区分をおこなった。

「1～6号、9号、17号」は埴丘の特徴や出土土器から弥生時代の墳墓と判断できるので、これらは「1～6号墓、9号墓、17号墓」とする。「7号、10号、11号、14～16号、18～21号、25～27号」は古墳と確認された。また、「12号、13号、22～24号」は立地から判断して古墳と推測できる。よって、これらは「〇号墳」と呼称する。これに合わせて、従来「番外1号～5号」と呼ばれていた埴丘をもたない墓については、その埋葬施設の構造をとつて「1号土壙墓、2号石棺墓、3号石棺墓、4号土壙墓、5号石棺墓」とする。

²結局、報告書に記載された規模は、発掘調査前の所見にすぎないように思われる。

³発掘では表土（第1層）除去後に東溝を確認しているのに対して、西溝を検出するにあたっては不整形なトレンチを設定してさらに掘り下げをおこなってからこれを確認したのが不審だ。これは埴丘西斜

面で「第4層」とみなされた土層が、一部後世の堆積土だったからではないか。筆者は、第4層が「旧表土」、第5層は地山とみるほうがよい、と考えている。つまり、まず旧表土以下を方形に形成した。この時、東西の溝も掘られた。その後、第3層を盛土し、墓坑を掘って木棺を安置したのち、さらに第2層を盛った、と推測する。

なお、盛土の最上層とされる第2層は、埴丘の南北断面では埴丘北側と想定した地山の傾斜変換点を越えてさらに北まで延びることになっている。これは理解に苦しむ。写真を見ると、第3層北端あたりで土層の違いを認めるので、その附近から北は別の層とすべきである。

「報告書に掲載された遺物は、「墓坑」の土師器壺と鉄刀子、西溝の須恵器と土師器である（報告書第9図）。このうち、西溝の土師器壺2点（報告書第9図5・6）は同一個体、東溝の土師器壺は図示されていないが、接合作業によって同化できたので、そのほかのものと合わせて掲出した。

⁴短劍と短劍の区別については、池淵後一（池淵1993）にしたがい37cm前後を区分基準とした。

⁵斐伊川の旧河道（奈良時代の「出雲大川」）については、（山田・高安2006）などをもとに、現在の出雲市八島町・常松町・平野町・高岡町・萩原町あたりと考える。本書の高橋論文を参照のこと。

⁶Ⅲ区加工段5出土土器の型式について、報告者の萩雅人は「松山編年の大敷上層式（大谷編年出雲1期併行期）」とし、須恵器は「出雲2期（TK10併行期）」とする（萩・浅野2003 63～65頁）。また、池淵後一はこれを松山Ⅲ期として須恵器の共伴を認めている（池淵2008 298・299頁第199図）。須恵器の蓋杯身は、直径11.6cmしかなく「出雲1期」と考えるので、土師器・須恵器とも「松山Ⅳ期」としてよろう。

⁷（山本1971）に「35 浅柄」と掲載された資料と推測される。記録が「山本資料」（島根県埋蔵文化財調査研究センター所蔵）にある。

⁸なお「空間B」のうち「壁面の一部に小口積みの手法を用いるものなど」は「B'」としている。この型式の石棺については吉田学の論考（吉田2002）を参照。

⁹仲仙寺5号墳には須恵器の副葬がなく細身の中空金環と飾があること、中ノ空古墳には櫛や鉄剣、尖根鐵鎌があること、左置1号墳の須恵器は山本Ⅲ期でもⅡ期に近いこと、などがその根拠である。

これ以外の型式の時期について山本は、I A：古墳発生期（四隅突出型埴丘墓の時期；筆者注）からみられ、古墳時代前期から中・後期初頭のころまでが

多く、後期中葉以降はまれである。I B：おもに中期末から後期に行われたのであろう、II B：中期末から後期であろう、としている（山本1971）。山陰の箱形石棺の盛行時期については、岩橋孝典も言及している（岩橋2007）。

それによると、弥生時代の伯耆・因幡（鳥取県下）には箱形石棺はない。石見では弥生時代後期中頃に順庵原1号墓（邑南町）がある。これは、安芸山間部との交流の結果という。また、出雲では弥生時代後期後業に仲仙寺9号墓・10号墓（安来市荒島町）があるが、石見・出雲とも類例は少ない。これに対して古墳時代前期になると、山陰各地に出現する。

¹¹ 守岡正司は「底石の有無、掘形と石材の置き方の関連が視点となる」と指摘している（守岡1996）。

¹² 金田善敬によれば、岡山県地域では鉄製U字形鎌・鋸先は天狗山古墳（倉敷市真備町）など「中期後業以後に出土数が増え」、それを装着した木製土木具は中期後半期の百間川原尾島遺跡に例がある

（金田2005）。

¹³ 報告書では7号墳を、溝で区画された基壇の上に東西約23m、南北約15m、高さ1mの「主墳」があると考えている。だが、20ヶ所のトレントチ土層断面図に「盛土」とされた土層はこの「主墳」の範囲（125頁、図129）を越えて外側に広がっている。「盛土」の範囲を拾うと、東西約25m、南北約18m、高さ約2mの規模となる。

¹⁴ もちろん、大成古墳（一辺60m）や造山1号墳（60×50m、ともに安来市荒島町）とは較べるべくもないが、破鏡を副葬した小屋谷3号墳（19×15m、松江市八雲町）や古城山古墳（19×15m、八束郡東出雲町）、盤龍鏡を副葬した月廻番外3号墳（一辺23m、松江市）、三角縁神獣鏡を副葬した八日山1号墳（一辺23.5m、松江市新庄町）などとほぼ同規模をそなえていることは、一応、留意しておいてよいと考える。

参考文献

- 赤澤秀則ほか 2002『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鳥根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会
- 足立克己・丹羽野裕 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』一朝日ケ丘団地造成工事に伴う発掘調査一、鳥根県教育委員会
- 出雲考古学研究会編 1980『古代の出雲を考える2 一西谷墳墓群一』
- 池淵俊一 1993『鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀劍類を中心として－』『古代文化研究』第1号、鳥根県古代文化センター、41～104頁
- 池淵俊一 2008『総括 第2節古墳時代中期前半の遭構・遺物に関する諸問題』『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I、鳥根県教育委員会、294～320頁
- 板垣旭・広江耕史・桑原真治 1988『夫敷遺跡』国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI、建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会
- 今岡一三 2009『御崎谷遺跡・閑谷東遺跡・浅柄北古墳・閑谷西2遺跡・閑谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3、鳥根県教育委員会
- 今岡一三・梶田勝造 1999『三田谷I遺跡 vol.1』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5、建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会
- 岩橋孝典 2007『山陰弥生墓制の検討と四隅突出型埴丘墓の特質』『四隅突出型埴丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 内田律雄ほか 2007『山持遺跡(IV区) Vol.3』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V、鳥根県教育委員会
- 大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の幅年と地域性』『鳥根考古学会誌』第11集、鳥根考古学会、39～82頁
- 大庭俊次ほか 2010『梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡II』一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3、国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育委員会
- 景山真二・曾田辰雄 2008『玉泉寺裏遺跡・浜井場4号墳・閑谷東古墳』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査2、鳥根県教育委員会
- 勝部智明 2001『古志本郷遺跡II』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書11、国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育委員会
- 勝部智明ほか 2000『三田谷I遺跡 Vol.2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8、建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会

- 金田善敬 2005「岡山県における木製土木具の鉄器化」『待兼山考古学論集 一都出比呂志先生退任記念一』大阪大学考古学友の会, 199~208頁
- 川原和人ほか 2005『畠ノ前遺跡・菅原I遺跡・クボ山遺跡・菅原II遺跡・菅原III遺跡・畠田V遺跡・保知石遺跡・浅柄II遺跡・桿ノ内I遺跡』山陰自動車道鳥取益田線(宍道~出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2, 日本道路公团中国支社・島根県教育委員会
- 金在弘 2005「楽浪地域の鳳山墓洞里5号磚室墓出土U字形銅先」『考古学誌』第14輯, 韓国考古美術研究所, 59~85頁
- 久保田一郎ほか 2005『中野清水遺跡2』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告6, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 近藤正 1970『玉造鳥坊遺跡群・古墳群・集落跡・古墓群の記録一』玉湯町教育委員会S
- 坂本豊治 2002『中野西遺跡』出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書, 出雲市教育委員会
- 坂本豊治ほか 2006『西谷塙墓群・平成14年~16年度発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 坂本豊治ほか 2010『矢野遺跡』新入藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市の文化財報告10, 出雲市教育委員会
- 穴道元弘 1992『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告10, 斐川町教育委員会
- 杉原清一・大槻智徳 1997『ひろげ遺跡』主要地方道大社日御崎線中山工区特別県単(改良)工事に係わる発掘調査報告書, 大社町教育委員会
- 杉原清一ほか 1987『庭反II遺跡・他 昭和61年度調査報告書』湖陵町教育委員会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 鳥谷芳雄 2000『三田谷I遺跡 Vol.3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 中川寧ほか 2008『里方本郷遺跡・山持遺跡4(5区・7区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 西尾克己ほか 1980『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 萩雅人・浅野哲 2003『長廻遺跡(vol.2)・權現山古墳』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書18, 国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 蓮岡法鶴ほか 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 原俊二 1990『南許豆神社古墳群I』平田市教育委員会
- 平田市誌編さん委員会 1969『平田市誌』平田市
- 藤原幸雄・足立千利・岡崎雄二郎 1978『史跡金崎古墳群』昭和52年度環境整備事業報告書, 松江市教育委員会
- 古瀬清秀 1998『農工具』『古墳時代の研究』8古墳II副葬品, 雄山閣出版, 71~91頁
- 松山智弘 1991『出雲における古墳時代前半期の土器の様相 一大東式の再検討ー』『島根考古学会誌』第8集, 島根考古学会, 1~29頁
- 松山智弘 2000『小谷式再検討ー出雲平野における新資料からー』『島根考古学会誌』第17集, 島根考古学会, 99~130頁
- 三吉秀充 2010『矢野遺跡C区SD3042出土の初期須恵器について』『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』新入藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市教育委員会, 159~162頁
- 三宅博士ほか 1985『奥才古墳群』鹿島町教育委員会
- 村上恭通・山村芳貴 2003『農工具』『考古資料大観』第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品, 小学館, 265~271頁
- 守岡正司 1996『来得石を使った古墳』『宍道町歴史叢書』1, 宍道町教育委員会, 1~15頁
- 山田和芳・高安克己 2006『「神門水海」の湖岸線復元・地形・地質コアによる検討ー』『出雲国風土記の研究III 神門水海北辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター調査研究報告書34, 島根県古代文化センター, 41~52頁
- 山本清 1959『山陰地方村落古墳の様相』『島根大学論集(人文科学)』第9号, 島根大学

- 山本 清 1964 「小規模古墳について」『島根大学論集（人文学科）』第13号、島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会、1971年 に所収）
- 山本 清 1971 「山陰の石棺についてIV」『山陰文化研究紀要』第11号、島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会、1971年 に所収）
- 湯村 功ほか 1993 『簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う 西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 吉田 学 2002 「山陰東部の小堅穴式石室についての一考察—石棺系小堅穴式石室の構造を中心として—」『島根考古学会誌』第19号、島根考古学会、65~97頁
- 米田美江子 2001 『池田古墳』一塙バス営業所用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市教育委員会
- 四方田三己ほか 1997 『大倉IV遺跡・綿田原I遺跡』㈱出雲空港カントリー俱楽部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書、斐川町教育委員会
- 李東冠・保元良美・小嶋篤・武末純一 2008 「弥生・古墳時代の日韓鉄製農具研究 一タビ・サルボを中心として—」『日・韓交流の考古学』嶺南考古学会・九州考古学会第8回合同考古学大会、117~132頁
- 渡辺貞幸ほか 1992 「西谷墳墓群の調査（I）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学考古学研究室

【資料紹介】

大井谷II遺跡の防長型土師器

高橋 周

1.はじめに

出雲弥生の森博物館では、2010年（平成22）10月23日～1月10日にかけて『ミニ企画展』「出雲を掘る 第一話－出雲市発掘成果展－」と題し、出雲市が発掘した遺跡で今までに公開の機会が少なかった出土品を展示した。その中に、出雲市上塩治町に所在する大井谷II遺跡の出土品があった。展示に際して、同遺跡の出土品について再整理を行ったところ、中世の土器のなかに防長型土師器碗が含まれていることが明らかとなった。

防長型土師器碗はその名の如く、周防・長門地域に分布する土師器である。器形は吉備型土師器碗に似るが、回転台成形であることが大きな違いである。従来、山陰地方では防長型土師器碗の報告例はなく、既往の研究でもこの種の土器は中国山地を越えていないという見解が通説となっていた（森1992）。今回の防長型土師器碗の確認は、その通説を覆し、山陰地方への流入を示唆するものである。

本稿においては、大井谷II遺跡と確認した土師器の概要について示す。詳細な検討は稿を改めて行う予定である。

2.大井谷II遺跡の遺構とその性格

大井谷II遺跡は出雲市街の南東に位置し、斐伊川と神戸川の間を流れる大井谷川が開いた小規模な谷地形、大井谷の最奥部に立地する。大井谷の開口部には築山遺跡があり、6世紀後半の上塩治築山古墳とそれを取り巻く円墳群や13～15世紀の塩治氏に関わる屋敷地が確認される。また、大井谷をめぐる丘陵部には6～7世紀の上塩治横穴墓群が造られる。

大井谷II遺跡からは大量の遺物が出土した。

遺物の時期は、7～9世紀と13～15世紀がその中心となる。いずれの時期とも仏教に関わる遺物が多く、付近に寺院の存在が推測される。現在も同遺跡の北側には般若寺が立地する。

確認された遺構は13～15世紀に相当するものが多く、人為的に造成された平坦地の上に造られる。平坦地の西側には、南北4間×東西3間の東に庇をもつ掘立柱建物が確認された。東向きの建物と考えられ、その正面には角塔婆を建てた痕跡があるとされる。付近の遺構から、同時期の香炉・燭台・花瓶の三具足が出土しており、報告書では同遺構を寺院の本堂に相当するものと推定する（岸ほか2001）。そして、平坦地の東側、掘立柱建物正面には石積で護岸された池状遺構と石敷建物跡が確認される。掘立柱建物や池状遺構などは少なくとも15世紀には機能したとみられ、同時期に並存した可能性が高い。地形的な制約がある中で建物を東面させ、その西に園池をおく配置となることから、浄土思想の影響を受けた計画的な造作を推測させる。同様の遺構は出雲平野において類例がなく、今後遺構の再検討も必要となろう。

防長型土師器碗は掘立柱建物と池状遺構との間に南北に走る大溝03と、池状遺構の東側を南北に走る大溝04より出土した。大溝はともに幅7～8m、深さ2m前後の規模である。両溝の遺物には7～9世紀のものも含まれるが、基本的には13～15世紀のものが中心となる。その中には、龍泉窯系青磁・白磁・青白磁などの貿易陶器、備前焼・常滑焼・瀬戸焼などの国内陶器が認められる。

3.出土した防長型土師器碗について

大溝03出土の土師器碗は1点（図1-①）。その法量は口径10.6cm、器高3.0cm、高台径6.6cmで、色調は浅黄橙色（Hue7.5YR 4/8）である。体部は直線的に立ち上がり、断面形が四角形状

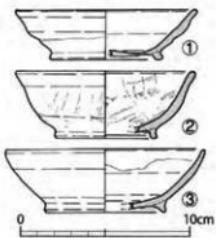


図1 土師器碗実測図(1/3)

の高台を貼り付ける。成形には回転台を用いたと思われるが、切り離しの手法は不明である。切り離し後、底部をユビオサエで調整して、高台を貼り付けている。また、高台を貼り付け時の余分な粘土を体部外面へ引き伸ばし、高台外面に強いナデを施す。体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められる。

次に、大溝04出土の土師器碗は2点ある(図1-②・③)。ともに色調は灰白色(Hue2.5Y8/2)を呈し、緻密な胎土である。②の法量は口径10.6cm、器高4.0cm、高台径6.0cmである。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部をやや外反させる。高台は断面形が三角形状で、わずかに外反する。回転台による成形の後、体部下半をユビオサエで調整する。底部の切り離し手法は回転糸切りとみられる。高台を貼り付け後、高台および体部下半に再び回転台によるナデ調整を施している。また、体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められる。③の法量は、口径11.7cm、器高3.8cm、高台径7.2cmである。内面全体にわたり油煙が付着しており、灯明皿に使用されたとみられる。体部は丸みをもって立ち上がり、断面形が三角形状の高台を貼り付ける。高台は外側にやや開く。被熱のため調整が明瞭に残っていないが、②と同様に、回転台での成形後、体部下半をユビオサエで調整する。底部の切り離し手法は、高台貼り付け後のナデ調整のため不明である。体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められ、口縁端部に同

様の工具によるヨコナデの調整が施される。

4.おわりに

以上、大井谷II遺跡出土の防長型土師器碗について紹介した。その年代については、13~15世紀代と考えられ、造構の年代とも矛盾しない。さらに詳細な検討を加えた上で、その他の防長型土師器碗と比較し、本資料の年代的な位置付けを考えたい。

中世の土師質土器については、陶磁器の大量流通に対して、小地域ごとに生産消費されていったとする見方が支配的とされる。ところが、吉備型土師器碗については、胎土分析の結果、その需給体制は小地域で完結するものではなく、瀬戸内沿岸部一帯を覆う形で展開していたことが明らかとなっている(鈴木・白石1996)。

今回紹介した防長型土師器碗については、上記の展開を示唆するものか、防長地域と大井谷に存した寺院あるいは寺院を支えた有力者とのピンポイントの関係か、更なる検討を要する。しかしながら、出雲地域の中世土師器をめぐる研究に、本資料が新たな視点を加えることは間違いないだろう。

【後記】 本資料の検討に際し、乗岡実氏(岡山市教育委員会)、福田正継氏よりご教示を賜った。記して、感謝申し上げる次第である。

参考文献

岸道三ほか 2001『大井谷I遺跡・大井谷II遺跡斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ』出雲市教育委員会

森 隆 1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について—西日本の土器碗生産を中心とした—」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』3-54頁

鈴木康之・白石純1996「土師質土器碗の需給体制について—草戸千軒町遺跡および周辺遺跡出土資料の分析—」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』広島県教育委員会

執筆者紹介

渡邊貞幸 出雲弥生の森博物館館長
島根大学名誉教授

高橋 周 出雲弥生の森博物館 研究員

須賀照隆 出雲弥生の森博物館 主事

花谷 浩 出雲市文化環境部 学芸調整官

出雲弥生の森博物館研究紀要 第1集

発行日 2011年3月25日

編集・発行 出雲弥生の森博物館

(出雲市文化環境部文化財課)

〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

TEL. 0853-25-1841

FAX. 0853-21-6617

E-mail yayoi@city.izumo.shimane.jp

Home page <http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori>

印 刷 株式会社 報光社